
真剣で私に恋しなさい！ 平和な日常を目指して

息抜き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で私に恋しなさい！ 平和な日常を目指して

【Nコード】

N5869S

【作者名】

息抜き

【あらすじ】

この作品は真剣で私に恋しなさい！の二次創作です。

主人公最強、ハーレム・・・とまではいきませんがその領域に片足を突っ込むくらいはするかもしれません

この作品の目的は、真剣で私に恋しなさい！竜舌蘭 の条件を男オリ主に完膚なきまでにぶっ潰してもらい、皆仲の良い平和なまじこいを送ろう！というものです

なので、ネタバレを多分に含みますので原作未プレイの方はお気を付けください。

誤字誤表現多々あると思いますが、それでも構わない！という方は
どうぞ

プロローグ

俺、識文悟は物語が大好きだ。

本はもちろん、ゲーム、アニメ、語りに至るまでジャンルは問わない。

子供の頃から物語を読むのが好きだった俺は、文字が読めない時は母に昔話を何度もせがみ、ひらがなを覚えてからは絵本を、漢字を覚えてからは漫画や子供でも読める簡単な本を読んでいた。

それはもう四六時中読んだ。家から出ることは殆どなく、図書館と本屋を行くくらい。

幼稚園に通っていない俺は半引き籠り状態と言ってもよく、五歳になるころには1000を超える物語を読んだ、と母が言っていた。ジャンルは様々、日常、SF、ファンタジーと色々なものを読んだものだ。

さて

突然だけどここで一つ質問をしたい

人は時速100キロで走ることが出来るか？

人は手や目からビームを出すことが出来るか？

人は水の上を走ることが出来るか？

答えは勿論不可能

時速100キロで早く走ることが出来ないから車が生まれ、素手では離れた場所に攻撃出来ないから弓や銃が作られ、水の上を走行できないから泳ぎや船が存在する。

俺が読んだ日常のジャンルの物語でも、先ほどあげたような超人的な芸当を行う描写は殆ど無い。

あったとしても、それはギャグシーンであつたり、少し非日常要素をその物語の世界観に元々含んでたものだ。

人は空も飛べないし、素手で滝を割ることなど出来ない。

残念ながら魔法使いはいないし、高度な知能を持ったAIや、ロボットが出来るのは何十年、何百年も後。

それが俺にとっての一般常識だった。

そう、「だった」のだ。

この表現で分かる通り、そんな様々な物語を通して積み上げてきた俺の一般常識を粉々に粉碎されたのは俺が6歳の誕生日を迎えたとき。

来年から小学校に通うにも関わらず、家から殆ど出ず外の世界に関わりを持つとしない息子に友達は出来るのだろうか？

という心配をした両親に説得とお説教を兼ねた話をされた。

確かに、いつも外に出るときはどんな物語に出会えるか？ということに頭が一杯で、帰るときは大量の本を手に入れた満足感で周りが見えず、近所にどんな家が建っているかすら覚えていない。

覚えてるのは我が家と、図書館、それといつもお世話になっている商店街にある川神書店くらい、道もその三か所を結ぶ最短距離しか知らない

一通りのジャンルを読み終え、自分が住んでいる世界にも興味が出た俺は、週の半分は外に遊びに行くことを約束した。

そして外に遊びに行く初日。

いつもは本を入れるためのカバンを持たずの初めての外出。

ハンカチ片手に涙する母と、それを抱きしめる父に見守られながら開けた扉。

さあ！一体どんな日常の物語が待っているのか！

そう意気揚々と外に一步踏み出し、いつもは図書館と本屋に行くために右に曲がる道を直進し川を目指す。

様々な漫画に出てくる「河原」

不良同士が殴り合いの後に友情を深めあったり、悩みを持つ人が土手に座り友人に打ち明けたりする言わば名所というものを実際に見たいと思ったからだ。

町の人々は活気があり、自分と同年代の子達は元気に走り回っている。

道行く人々、行き交う車

肌を撫でる風、眩しい太陽、周りの喧騒、焼き鳥屋から流れてくる香ばしい香り

それ一つ一つが物語

そしてこれが俺の日常の物語

目や耳だけを通してではなく体すべてを使って読む物語に俺はすぐに夢中になった。

それと同時に、今までなぜ外に出なかったのかという後悔が生まれる
まだ家を出て五分も経っていないのにも関わらず、気分は最高潮。

河原に行けばどんな素晴らし物語が待っているのだろう。

さあ、次の角を曲がれば目的地の河原だ！

期待に踊る胸を抑え曲がり角を曲がり、まず目に入ったのは

「川神流・・・は使わなくていいか、適当右ぱーんち」

キキーツ！

ドオオオオオン！

パラパラ

歩道に飛び出した猫

急ブレーキをかけるトラック

そして

それを素手で止める男性だった

「は？」

そこで俺は初めて知った

俺の住む物語のジャンルは日常では無かったことに。

幼少期編 第一話

「・・・・・・・・・・・・・・・・ツハ」

目の前の光景に呆然としていた俺が現実に戻るために要した時間は数十秒。

それが早いか遅いかは分からないが、今のセリフが間抜けなものだということは確かだろう。

「危なかったなあ、オイ、 ってやめろって舐めんじゃねえよ」

猫に顔を舐められている男性を尻目に、先ほどの状況を思い返す

俺が曲がり角を曲がったのと同じ時、猫が道に それもトラックの目の前に飛び出したのだ。

直後にクラクションと急ブレーキの甲高い音が鳴り響き、道行く人が何事かとトラックの方へと目を向けていた。

それがいけなかった。

猫は突然の爆音と迫りくるトラックを見てその場で足を止めてしまったのだ。

十分な減速が出来ていないトラックが猫にぶつかれば、どうなるかは一瞬で想像できる。

物語だったら主人公が飛び出して猫を抱き上げ、間一髪トラックから助け出すという場面だろう。
しかし、ここは現実の世界。

既に猫は轢かれる直前で、トラックと猫の近くには人一人居なかった。

俺は反射的に猫を助けようとして、走り出そうとしたが距離は20m以上。間に合うわけがない。

周囲にいた子連れの親は咄嗟に子供が見えないように子供の目を塞いだり、一人で歩いていた会社員風の女性は自分の手を口に当て叫び声をあげる直前だった。

駄目か

そう俺が諦め、目を逸らそうとした時

「しゃあねえな・・・まったく面倒臭え」

目を逸らした先

無精髭を生やし、灰色のシャツに黒いジーンズを穿いた中年一歩手前といった年齢の男性は、片手にスーパーの袋を持ち空いた手で頭をボリボリと掻きながら、心底面倒臭そうな声をあげていた。

面倒臭いと言ったのは事故の現場出くわした事が、それとも別の事に対してか？
そんな疑問が俺に浮かぶよりも早く、男性はスーパーの袋を地面に置き

次の瞬間

一歩踏み出すと同時に、男性は一陣の風と共にその場から消えた。

いや、目につきやすい黒系の服のお蔭で影だけはとらえることが出来た。

男性の影は人間が出せる限界速度を大きく超えた速さで硬直している猫とトラックの間に割って入り

そして

「川神流・・・は使わなくていいか。適当右ぱーんち」

そんなやる気のない掛け声とともに繰り出された右ストレートがトラックに当たり

ドオオオオオン！

っという爆音と共にトラックが強制的に停止した。

回想終了

やはり何かがおかしい、物理法則どこにいった？帰ってこい。
いや、俺は物理法則に詳しいわけじゃないけど今のが普通じゃない
って事くらいは分かる。

20mの距離を一秒からず移動する？おめでとう、多分世界新記録だ

トラックを一步も動かず片手で受け止める？多分陸上生物初の快挙だ。

改めてみるとトラックは四トントラック。
しかも赤信号、皆で渡れば怖くないと思ってる小学生1ダースは軽く
まとめて吹き飛ばしそんな速度だった。（法定速度は守っていた
が）

「おいおい、手の甲擦り剥けちゃったよ　　いてて、滲みるから
舐めんな。猫は恩返しする生物じゃねえのかよ」

そんな俺の混乱を余所に混乱の原因である当の男性は猫と戯れていた。
た。

トラックを止めたことに対して、それが当然といった様子だ。

ちなみに他の人たちの反応は 良かった、周りも呆然としている。子供の目を塞いでいた親は、既に子供が自分の手を振りほどいていることに気づかずあんぐりと口を開け、会社員風の女性は叫び声をあげる直前の姿勢で硬直していた。

これが普通じゃないのはこの場共通の認識らし

「何だ、川神院か」

What?

何納得してらっしゃるんですか会社員風のお姉さん

「川神院ね」

子連れのお母さん、なぜそんな当たり前のような反応をしているんですか？

「川神院だー！」

少年　　いや俺と同年くらいか。

それはともかくなぜそんなヒーローに会ったみたいな目で見てるんですか　　いや、猫救ったヒーローだけどさ。

会社員風お姉さんの言葉を皮切りに、周囲の動揺が収まり

「よくやった兄ちゃん！」

「キヤー、ステキー！」

やがて歓声に変わっていった

「おいおい、おじさんすつごい良い人みたいに思われてんじゃん
ってこんなことしてる場合じゃなかった」

居心地の悪そうに身を震わせた男性は歓声に応えることなく、猫を地面に下した男性は未だ状況に追いつけずにいた俺の所に戻りスパーの袋を拾い上げると

「坊主、お前面白いな」

「え？」

俺に向かって一言言い、逃げるように去って行った。

そこから先の事はよく覚えていない。

呆然とした俺の頭からは、当初の目的会った「河原を見る」という事などスッポリ抜け落ち

「ただいまー」

帰巢本能に従った俺は、気づけば家にたどり着いていた。

陽の傾き具合からして家を出てから数時間といったところ。それほど街を無意識に彷徨い良く帰ってこれたものだと思ふ。

「おかえり」

扉を開けるとそこにはやや緊張気味の母さんが立っていた。まさか俺が帰ってくるまでずっと待っていたのだろうか？

廊下の奥を見れば、俺の声を聞きつけて父さんがやってくる場所だった。

「ね、ねえ、悟。外は楽しかった」

恐る恐ると言った感じで母さんが訪ねてくる。

正直に「最初の五分以外は全く覚えていない」なんてことが言えるわけなく。

「うん、楽しかったよ」

と笑顔で言う。

別に嘘ではない。最初の五分間は楽しかったのは確かだ。

「そう、良かった・・・」

それを聞いた母さんは安心したように胸を撫で下ろし、父さんも満足したようによかったよかった、と頷いていた

「ところで父さん、母さん」

だからこんな質問をするのは本当はヤメテおきたいけれど、せずにはいられなかった。

「時速40kmで走ってくるトラックを素手で止めるって、普通だと思う？」

父さんも母さんも困惑したように顔を見合わせた。

「それは、オモチャじゃなくて本物のトラックってことか？」

聞き返す父さんに、「それも四トトラック」と付け加え反応を伺う。益々困惑した風の父さんは数秒経つと、俺の肩に両手を置きしゃがんで目線を合わせ

「いいか悟、普通の人にはそんな事は出来ない」

絶対に、とそう断言した。

「そ、そうだよね!」

俺は思わず弾かれたように顔をあげる。

「ああ、そうだ」

と念を押す父さんの言葉に胸のつつかえが取れた気がした。そして確信した。

結論、あれは夢だ。白昼夢を見たに違いない。

もしくは集団幻覚。そうだ、そうに違いない。「KAWAKAMI IN」はきっとその幻覚症状の名称の類だろう。

そもそも物理法則に真正面から喧嘩売るアレを現実と思ったのが間違いだつ 「そんな事出来るのは鉄心さんくらいだろう」なんですと?

「あと、釈迦堂さんくらいかしらね」

頬に手を当て思い出すように言う母さん。
今二人はなんと言った?

「つまり、普通じゃない人なら・・・」

「ああ、あの人たちくらいならトラック位止めれるだろうな
って悟、どこに行くんだ?」

トラック位と来ましたか。ならダンプカーまでなら止められんのかよコンチクショウ。

「悟？もうすぐご飯作るわよー」

引き留めようとする二人の間をすり抜けて二階にある自室へと向かい、ドアと窓の力ギをかけてカーテンを全て閉める。

枕元に何冊も積み上げられた本を丁寧にとかって、近所迷惑を考えた俺は布団を頭までかぶり

「なんじゃそりゃああああああああああ！！！！！！」

精一杯叫んだ

幼少期編 第一話（後書き）

酷い文だろ？信じられるか、こんな文書くのに四時間かかったんだぜ？

どうも、初めまして息抜きと言います

平和な日常を目指して を読んでいただきありがとうございます

^^

プロローグに前書き後書きを入れ忘れていたのでこれが初めての後書きになりました

映像として頭に浮かぶのですが、それを文字にするのがここまで難しいとは・・・

少しずつ上達していきたいです。

時たまサブタイトルに出てくる「表」「裏」そのままの意味。「表」で〜があったころ一方「裏」ではといった感じです。

幼少期編 第二話 裏

釈迦堂は、スーパーのコンビ二袋片手に一人歩いていた。

鋭い目つきに野獣のような雰囲気、これで黒いスーツを着ていればどう見てもヤのつく自由業の方。

少なくとも彼を見て、誰も彼がかの高名な川神院の師範代だとは思わないだろう。

普段目立つ事をあまり好まず、自分の風貌と自分に対する周囲の印象を自覚している釈迦堂は、気を抑え、周囲に溶け込むように行動するのだが、
やや不機嫌であつた釈迦堂は自分でも気づかない内に周囲に気を漏らしていた。

何故彼がやや不機嫌なのかというと、彼の教え子である百代が新しい技を習得し、それに対するご褒美にアイスを要求してきたのが始まりだった。

面倒くさいと最初は断っていた釈迦堂だったが、

「なあーいいだろー師範代、ちゃんと技習得したんだからアイス下さいよー」

「わーっだから服離せ！伸びちまうだろうが」

といった感じに5分経つてもめげずに要求し続ける百代についに折れ、渋々ながらも買いに行くことにしたのだった。

何だかんだ言っても、自分の事を慕う数少ない教え子（唯一といってもいい）の百代には釈迦堂も甘かったのである。

とは言つても、そんな子供の我儘くらいで機嫌を悪くするほど釈迦堂も大人げなくはない。

指定されたアイスがコンビニには無く、適当なアイスを買おうとするが文句を言う百代がすぐに頭に浮んだ釈迦堂は、他のコンビニを数店回るがそこにもなく、態々スーパーまで買いに行ったがそこにもなく、半ば意地になり川神流高速移動法を使用してまで駅前デパートに行き、ようやく見つけたのである。

教え子には寛容でもアイスには大人げない釈迦堂であつた。不機嫌さを感じ取った人たちはそそくさと道を空けているが、その事に気づかず釈迦堂は歩く。

そんな彼が事件に遭遇したのは、人が疎らになり川神院まであと数分の河原近くの道路でのことだつた。

事件といつても、猫がトラックに轢かれそう、という釈迦堂にとつては割とどうでもいいような事だつたのだが

「じゃあねえな・・・たく面倒臭え」

助けなかったことが後で鉄心やルー辺りに知られたら、色々面倒だ。少なくともまた川神院の心構えとやらを一から教え込まれるのは確実。

助ける労力と助けなかった時のリスクの天秤が前者に傾き、尚且つ見捨てる程非情では無かつた釈迦堂はスーパーの袋を地面に置き、気を足に溜め

「ほっ」

軽く息を吐くと共に踏み出し、常人には影さえ掴めぬ速度でトラックの前に移動した。

（さて、どうするか）

四トトラックが目の前に迫っているにも関わらず、釈迦堂に焦りは無い。

ノンビリと構えながら猫を助ける方法を模索し

（まあ、力尽くで止めれば問題ないか）

一番簡単かつ手っ取り早い方法を選択する。

「川神流・・・は使わなくていいか。適当右ぱーんち」

気合いの無い声とは裏腹に気の籠った拳をトラックに叩きつける。

拳はトラックにめり込み、直後に金属が潰れる鈍い音とトラック同士がぶつかり合った様な激しい音が響いた。

突然の強い衝撃から運転手を守るためにエアバックが作動し、トラックの後輪は大きく浮き上がらせながらも停止する。

「つと、こんなもんか」

猫に怪我なし、トラックは見た目は酷いが運転手は無事。

まあ悪くはない成果だろうと釈迦堂は満足しながらトラックを止めた衝撃でアスファルトに埋まった足を引き抜く。

「俺が車をお釈迦にする・・・つと、つまんねえ事考えてる場合じゃないかったな」

百代に聞かれたら間違いなく笑われた上に数日はからかわれる。そんな事を思いながら未だ硬直している猫の抱き上げて怪我が無いの確認する。

「危なかったなあ、オイ、
ってやめろって舐めんじゃねえよ」

恩人に対する礼なのか、猫は釈迦堂の顔を舐める。

猫が好きな人にとっては嬉しい行為だが、猫に対してそんな感情を持つていない釈迦堂にはただうっとおしいだけだ。

舌を突き出して顔を舐めようとする猫を遠ざけると、猫は納得いかないようにジタバタともがいていたが、やがて大人しくなった。そこで釈迦堂は自分の手の甲が赤くなっていることに気づいた。十分に気を込めていなかったのが原因だろう、流石にトラックを舐めすぎたか、と溜息をつく。

「おいおい、手の甲擦り剥けちゃったよ
いてて、渗みるから舐めんな。猫は恩返しする生物じゃねえのかよ」

傷口への視線に気づいた猫がそこを重点的に舐めるのに、いっそ放り投げてやろうか？という考えが浮かぶが、行動を起こすよりも早く、釈迦堂はそこで自分に賞賛の聲がかけられていることに気付いた。

「おいおい、おじさんすっごい良い人みたいに思われてんじゃん
ってこんなことしてる場合じゃなかった」

周りを見れば結構な人数が集まってきていた。あれだけ大きな音を出したのだから当然のことだ。

別に気分が悪い訳ではないが、普段は周囲からは賞賛ではなくむしろ非難される事（特に同僚の師範代とか）の方が多い釈迦堂にとってこの状況は落ち着かないものだ。

一刻も早くこの場から去りたい釈迦堂は、半ば落とすように抱き上げていた猫をその場に下ろした後アイスを回収し

「坊主、お前面白いな」

「え？」

呆然とする少年にそう言い残し去っていった。

川神院まであと一分もかからない距離。

顔を上げれば既に川神院の門が見える距離まで来たが、釈迦堂は顔を伏せ、先ほどの事を思い返していた。

それは猫を助けた事でもなければトラックを止めた事でもなく、自分が最後に声をかけた少年の事。

（俺の勘違いじゃなきゃあ、あの坊主　　）

「師範代ー遅いですよー！」

とそこで釈迦堂は自分にかける聞き慣れた声に思考を中断し顔を上

げると、そこには川神院の門の前で腕を組む少女、百代の姿があった。

アイスが待ち切れずに門の前で待っていた様だ。手をブンブンと振りながら催促するように名前を呼ぶ百代。
その距離は大体20m程。

「分かった分かった、今すぐ行くから待ってろ」

釈迦堂は、猫を助けた時と同じ様に足に気を溜めて一瞬で百代の前まで移動する。

「溶けないウチに冷蔵庫に入れとけ」

おお、と感心したように目を丸めた百代は「ほれ」と釈迦堂が差し出した袋をすぐさま奪い取る様に受け取り、礼を言いながら笑みを浮かべる。

「おお、二つもあるぞ！」

「二つとも食うんじゃねえぞ、一つは俺んだからな」

ブーッと文句を言いながらも嬉しそうな百代と一緒に門をくぐり川神院へと入った釈迦堂は、ふと思いついたように

「そっぴや百代、一つ聞きたい事があんだが」

「何ですかー？」

冷蔵庫へと急ぐ百代を呼び止め、振り返る百代に一つの質問を投げ

かける。

「門の前で使った縮地、お前俺を目で追えたか？」

「いくら私が天才ばーふえくと美少女でも流石にまだあの速さを目で追うのは難しいぞ。精々影を捉える位です」

「そうか、呼び止めて悪かったな」

正直な答えに満足し、去って行く百代を見送りながら釈迦堂は口の端を吊り上げる。

「あの坊主、良い目持ってんじゃねえか。しかも雰囲気からして鍛錬なんざしてねえ……。育て方次第じゃ化けるか？」

「なんだあこの国は、鉄の娘や九鬼の娘と言い、次の世代は怪物が盛り沢山じゃねえか　　楽しくなつてきやがった」

まだ卵だけどな、と付け加える釈迦堂の顔は野獣のように、しかし目は子供のように無邪気に輝いていた。

ちなみにその後、トラック一台を壊した事で鉄心とルーの二人から説教を受けた釈迦堂は

「普通に猫抱えて避けりや良かった」

と後悔する事になった。

幼少期編 第二話 裏（後書き）

以上釈迦堂視点をお送りしました。

この作品の目的の一つは、原作のちょい悪な男メンバーを最終的に「さんかつけー！」にすることです。

釈迦堂さんや竜兵等を既にかっけーと思う方は、男前な麻呂をご期待ください。誰得かって？俺得です。

幼少期百代の口調がイマイチ掴めない・・・
ので敬語とタメ口の入り混じった感じにしてみました。子供には結構あるかも、という作者の勝手な想像です。

これだけ見ると主人公が四天王クラスに成長しそうですが、んなあ事はありません。

マルさんより少し強い程度にする予定です。十分すぎますが。

幼少期編 第二話

自分の中の常識、それが他の人には当てはまらなないと知った時、人はどういう反応をするのだろうか。

間違っているのは周りで正しいのは自分、と己を正当化するのか、それともそれとは逆に自分が間違っていると認め、周囲の常識に合わせようとするのか。

少なくとも悟は、前者を選ぶほど自分に絶対的な自信がある訳無く、かと言って後者を選ぶほど自分に自信がない訳でもないし自分の積み上げてきた人生観を急に変える度胸もなかった。

正直、今まで外にも出ず年中本を読み漁っていた六歳児に周囲が異常だ、と言える常識と人生観があるかと突っ込まれそうではあるが、今の悟にはそんなことを気にする余裕がなかった。

そもそも、所詮物語はフィクションの世界。

フィクションで培った自分の常識と世間の常識にある程度の差異あるだろうと自覚していた悟は、様々な所を見て差異があれば順次調整しようとしていたのだが。

「ありえねえよ、何だよ『適当ばーんちww』って、『擦り剥けちやった』じゃねーよ、普通に死ぬか奇跡起きても瀕死だろおい、周りも何納得してんだよ『川神院なら仕方ない』？仕方なくねーよ。そんなセリフで物理法則の異常許容してんじゃねーよ。動物の都皆でやろうと思ってたのに他の奴ら全員クリハンやってた位シヨックだよ。ジャンルどころか持つてるゲーム機からして違っじゃん。でもこの場合俺の方が非常識なのか？そもそも常識って何なんだよチクシヨウ」

調整どころか改造しないといけないレベルの差異を目の当たりにした悟が取った行動はシンプル。

「そうだよ、これだよコレコレ、コレが物理法則だよ。子供助けようとして車に轢かれたら普通に死ぬよ。あれ？でも主人公生き返った後探偵やってるぞ？まあいいや」

自分の殻に閉じ籠もる事だった。

両親から衝撃の事実を聞いた後、部屋に鍵をかけて引き籠ってから一晩。悟は両親が何度声をかけても一切の返事をせず、一晩中枕元の小さいランプだけを点灯し手当たり次第に本を読み漁っていた。その量なんと34冊（一冊平均500ページ）。どれだけ一心不乱に読んでいたかが分かる。

ともあれ、流石に一晩が経ち新たに陽が昇ってくる頃には混乱も大分落ち着きを見せ、今の自分を客観的に見る程度の余裕が生まれていた。

ベッドからゆっくりと起き上った悟は窓を開け、新鮮な空気を深呼吸で肺一杯に取り入れ気分を整え、取りあえずは今後の方針を決めなくてはいけない、と体を伸ばしながら考える。

週の半分は外に出るという両親との約束は今さら破りたくはない。かといって、外に出かけたときに先日のような事を目の当たりにして、今度は落ち着いていられるという保証も悟にはなかった。

「おーけいおーけい、取りあえずあれが現実だったのは認めよう。まずはそこからだ。確かにあの人はトラックを止めたし、その所為で負った傷は擦り傷だけだった。あんなビクリ人間みたいな真似は可能。でも昨日の父さんの言い方からするとそんな事出来るのは極一部の人間。そして川神院とやらにはそれを出来る人間が最低でも二人居る。けど認めたところであんなビクリ人間ショーをまた見せられたら昨晚みたいになるのはほぼ確実だ」

結論

川神院には絶対に近づかないようにする。これが悟の脳内会議で満場一致して可決されたことだった。

とは言っても川神市に住む以上は死ぬまで近づかない、というのは難しい。

だから一年間だけ絶対に近寄らないようにし、それまでに先日のような超常現象に対して耐性をつける。

これなら実現可能なレベルだろ、と自分に対してひとまずの結論を導き出した悟は、

「流石にお腹空いたな。そういえば昨日の晩から何も食べてないや」

これ以上両親を心配させないためにも一度部屋から出るべきだろうとリビングに行くことにした。

「多分母さんをまた泣かせちゃったかなあ・・・」

漂ってくる肉が焼ける香ばしい匂いに誘われながら、少々バツの悪

かった悟は気づかれないようにソロソロとリビングを覗く。

悟の母は台所に向かい朝ごはんを作っていた。テーブルの上にはサラダが簡単に盛り付けられた器、トーストとその横に盛り付けられたスクランブルエッグの皿が3組ずつ。

ちゃんと自分の分は出来ているようだ。後はベーコンが焼ければ完成。いいタイミングで来たものだ。

そう思いながら悟は父の姿を探すと、悟の父はソファに座りながら携帯電話で喋っていた。

「はい、では午前中にそちらに伺いますのでよろしくお願いします
つと悟、おはよう」

「おはよう」

丁度話が終わり、携帯をしまう父と目が合い挨拶を交わす。突然声を掛けられたことに少し驚いてしまった悟だったが、スムーズに返せたことに安堵する。

悟の父は無言で悟に近づくと、頭を一度だけクシャリと撫でテーブルに座って妻の作る料理を待った。

「ああ、悟起きたのね。おはよう」

「うん、おはよう」

悟達の声に悟の母も気付き声を掛けてくる。

目を少し充血させていた母に悟は胸がチクリと痛むのを感じながら、父と同じように挨拶を交わす。

悟の母はトーストの横に程よく良い色に焼けたベーコンを盛り付けると悟を手招きし、自分も席に着いた。

悟も席に着くと、一晩ぶりの家族そろっての食事が始まる。

悟の父も母も昨日の事について聞くことはせず、それが悟にとってはありがたかった。

父は仕事先であつた出来事を話し、母は少し心配そうに悟の方を時折チラチラと見ながらも父の話を聞いていた。

そんな二人を意識から外しながら、空腹だった悟は夢中でベーコンに噛り付いていた。

最終的にはトーストを4枚、ベーコンとスクランブルエッグを2回御代わりするという6歳児にとっては少々多い量を食べた悟は満足したように箸をおいた。

その時には食事前にあつた少々のぎこちなさも無くなり、いつも通りの識丈家に戻っていた。

母の食器洗いの手伝いを終えた悟は、一度仮眠を取ろうと部屋に戻る事にした。

なにせ一晩中本を読んでいたのだ、満腹感も合わり幼い悟の体は少しでも気を抜けばその場で寝てしまいそうなほど睡眠を欲していた。

「悟、今日は外に出るのか？」

半分意識が朦朧としながらもリビングから出ようとするが、父に呼び止められた悟は眠いと言えど無視する訳にも行かず振り返る。

「うん、今日も外で遊んでくる」

そうか、と頷いた悟の父はチラリと妻の方を見て一言

「なら、今日は皆で出掛けないか？」

「いいよ」

特に悩むことなく悟は了承した。

悟には家族でどこかに出かけたという覚えは余りない。（もちろん家に引き籠りずっと本を読んでいた悟が原因である）

久々に家族全員でどこかに出かける機会が出来たのだ。悟には行かないという選択肢はなかった。

それに、家族でどこかに出かけるとしたら遊園地、水族館といった場所や公園。

河原は昨日自分が一晩引き籠る原因になった場所だから恐らくは候補に挙がっていないだろうし、久々の外出だから遠出する可能性も高い。

川神院の場所が分からない悟は、下手に一人で彷徨って超常現象にエンカウントするよりは遥かに良いだろう、という考えもはあったのだ

「それで、何処に行くの？」

が、しかし

「川神院だ」

世の中そんなに甘くないのである。

s i d e
悟

「いやあああああああああ！！！！！！！」

「せやあああああああああああああああ！！！！！！！！！！！」

年月を感じる立派な木の門の向こうから聞こえてくる元気で楽しそうな声が響いてくる。

俺の頭より高く設置された看板には、これだけで値打ち物なんじゃないか、というほど達筆な文字で、「川神院」と書かれていた。

そういう訳でやってき（てしまい）ました川神院。

「帰りたい・・・眠いし・・・」

来るのを不本意というレベルではなく断固拒否したかったのだが、珍しく父さんが力ずくという外道な方法を取ったため7割方強制的に連れてこられたのである。

残りの三割？母さんの泣き落としですよ。アレほんとに卑怯。

「父さん、もう逃げないからコレ解いてよ」

自分の胸にグルグルに巻かれたロープを指さす。

最初、川神院という単語を聞いた時反射的に全力で逃げようとしたのだがソファアに座っていた父さんに一瞬で回り込まれ捕まってしまい、それでも逃走しようとした結果がコレである。

その回り込むスピードは先日男性に迫るものだったと書いておこう。

新事実 父も人外存在でした

ここまで来るときに父の背中で半分寝ながら説明をされたのだが、

何でも川神院とは川神流という武術を学ぶための場所で、その歴史は深く今では武術の総本山とも言われているらしい。

そりゃトラック片手で止める人外が最低二人も居る道場がゴロゴロあつてたまるか！というのが素直な感想だが。

ちなみに父と母も昔ここ川神院で教えを受けていて、二人が出会った場所でもあるとか。

となると母さんも人外である可能性が高い。普段の姿を見ているととてもそうには思えないが・・・

「ダメだ、少なくとも門に入るまでは解かない」

「さいですか・・・」

ロープをグイグイ引っ張りながら笑顔で否定する父さん。

もう覚悟を決めるしかないようだ。

つか子供をロープで縛って引きずるとか児童虐待にならないか？よく通報されなかったな あ、川神市だからか

「それにしても久しぶりだな」

「ええ、鉄心さん達には良く会ってたけど、ここに来ることは余りなかったものね」

俺が覚えていないだけで、何度か家族全員でここに来たことがあるらしいが、俺が引き籠るようになってからは来ていないんだとか。思い出に浸りながら門をくぐる父さん、母さんとそれに引きずられる俺

「ほっほ、よく来たの武君、つぐみ君」

そんな俺たちを出迎えてくれたのは、杖をつき白い髭を立派に蓄えた老人だった。

父さんと母さんの名を呼びながら微笑む姿は息子夫婦と久々に再会した親のようにも見える。知らない人が俺たちを見れば本当に家族と勘違いしそうだ。

「お久しぶりです、先生」

父さんと母さんも嬉しそうな顔で老人と握手をしながら挨拶を交わし、俺を（ロープで）自分の一歩前まで引つ張る。

挨拶をしろということだろうが、なんだろう、最近父さんからの扱いが雑になつてゐる気がする。

「初めまして、識丈悟です」

「ほっほ、初めまして、と言いたい所じゃが悟君とは何度か会ったことがあるんじゃない？悟君が今より小さいころにな」

お辞儀をする俺の頭を撫でながら笑う老人。

少しくすぐったいが嫌な感じはしない。父さんにもよく頭を撫でられるが、父さんの力強いのと比べると優しい感じだった。

父さんと母さんの両親は既に亡くなっていて、祖父というものがどういうものかは本でしか見たことがなかったが、きっと居ればこんな感じなのだろう。

しかし、油断してはいけない。

人外魔境（予想）の川神院に居て人外であつた父が先生と呼ぶこの老人が人外でない訳がないのだ。

流石にこの人がトラックを止められる程の人物であるとは思えないが

「と、自己紹介がまだじゃったの。川神院最高責任者の川神 鉄心じゃ」

そんな事はなかったようだ。

差し出された手を握り返した状態で、思わず固まる。

この人が父さんが最初に引き合いに出したトラックを素手で止められる人一号かよ。

「ほっほ？どうかしたかの？」

「い、いえ。よろしくお願いします」

半分フリーズした俺を余所に鉄心さんは父さんと一つ二つ言葉を交わすと、道場の方へ案内すると言い先ほどから声の聞こえる方へと歩き出した。

それに付いていく両親に、これ以上は引きずられたくないので俺もついていく。

しばらく歩いているとある建物の前で立ち止まった。武家屋敷のような大きな建物だ。

「ここが川神院の道場じゃ。ここで多くの者達が修練を積んでおる」

「おー」

自分の中で思い描いていた通りの立派な道場に思わず声が漏れる。

靴を脱ぎ道場の廊下にと上がると、さっきより大きくなった掛け声の他に重いものを床に叩きつける音が振動と一緒に聞こえてくる。

ほどなくして騒音と言っているいいレベルの音が聞こえてくる扉の前に着くと、鉄心さんが扉を開けて中に招き入れてくれた。

中に入ると、そこは建物の中とは思えないほど広い空間だった。

東京ドーム何個分という表現をよく聞くが、その四分の一はありそうだった。

そこでは多くの道着を来た人たちがそこで練習していた。

一人ひとりの掛け声が重なり合い部屋全体を震わせ、地面を砕けるのではと思うほどの踏み込みに木張りの床が悲鳴を上げる。

「ッ!!」

気迫といった目に見えないものが肌で感じながら、余りの迫力に息を呑む。

一人一人が真剣に修練に取り組んでいて怠けている人は一人も居ず、文字通り死ぬ気で全員が鍛錬をしていた。これが武術の総本山の川神院、と目の前の光景に釘付けになる。

そんな部屋の中で一人だけ違和感を感じる人物がいた。

女の子だ。

それも俺と同じくらいの歳の女の子が自分の身長の数倍、年齢に至っては三倍、四倍はありそうな男性と向かい合っていたのだ。

男性でもあの女の子と同じくらいの歳の子は俺を除いてこの場に一人もいない。一番若くても高校生くらいだ。だから最初は自分の目を疑ってしまった。

二人はお互いに礼をすると、3 mくらいの距離まで離れ同じように構えた。

周りと同じように両者の目は真剣で、教えを受けているという生徒と先生といった雰囲気ではない。

組手というヤツだろうことは理解できたが、だからこそ父娘と言ってもいい程歳の離れた二人が本気で組手をする事に訳が分からなくなった。

理解が追いつかずに二人の様子を静かに見守っていると、男性の方が動いた。

男性は3 m程の距離を一息で詰め、気合の入った掛け声と共に少女に鋭い蹴りを放ち、それは一直線に女の子の側頭部に吸い込まれていく。

あんなものが子供に当たったら一たまりもない。

危ない！

そう思わず叫ぼうとした時だった。

ドオオオオオオン！

と、喧騒入り混じる部屋に一段と大きな音が響き渡った。

近くで爆発物が爆発した音でもなければ、昨日のようにトラックを誰かが受け止めたわけでもない。

今の音は正真正銘、人が人に攻撃したことで発生した音だった。

気付けば女の子に蹴りかかっていた男性はその場から消え離れた壁に埋まりながら気絶し、そして女の子は拳を突き出した姿勢で静止していた。

何が起こったかは簡単。

蹴りが女の子に当たるよりも早く、女の子から突き出された正拳突きが男性に届いたのだ。

たったそれだけだ。

それだけで男性は10m以上離れた壁まで吹き飛ばされた。

目の前で起きたことが信じられなかった。ある意味素手でトラックを止める事より衝撃的な光景だ。

「ありがとうございました」

他の門下生に壁から救出されている男性に向かって礼をした女の子は、こちらの視線に気づいたように目を向けた。
俺と女の子の視線が交差する

これがこの世界一の非常識であり理不尽を誇る、川神百代との初めての出会いだった。

幼少期編 第二話（後書き）

といった感じでお送りした第二話「表」でした。

キリどころが分からなかったので気にせず書いていたらいつもの倍くらいの長さになっていた。

でもこれくらいの長さの方がいいのかな？

という訳で今回は百代との初邂逅です。

4話掛けてようやくここまでくれました。もっとテンポよくいきたいですね。

残念ながら、現段階で百代にフラグを立てる事は予定しておりません。

あらずじにハーレムになるかも？と書いておきながら、ヒロイン入りするかどうかは完全に今後の気分しだいです。

正直に言うメインヒロインは既に決まっていますのでその子一本に絞るか、それに一人か二人加えるか悩んでいます。

他の作者様の作品を読んでいるときは「ハーレム最高ー！」とか思っていたのですが、いざ自分で書いてみると余り気乗りしなくて自分でも驚きです。

やっぱり大和とヒロインのカップリングが好きだからですね。

でもこれだけは断言します。京は大和の嫁。これは絶対。

最後に今回の話の解説を二つほど。

・ 悟の両親

名前と容姿が全然思い浮かばなかったので自分の大好きなゲームの主人公とヒロインから名前をお借りしました。

結構有名なゲームなので知ってる人は多いと思います。ヒントはお母さんの元の人の声と百代の声はソックリです。お父さんの方の声はモロと因縁がありそうな感じ。

・ 川神院道場

とても広く、東京ドームの四分の一程と書きましたが、実際はもっと狭いです。これは自宅と図書館くらいしか建物の内部を見た事なかった悟が実際の広さよりも広いと錯覚してしまったということです。

図書館は結構広いと思いますが、障害物がない広い空間は悟にとって初めて見るものでした。実際は体育館くらいの大きさだと思ってください。

ちなみに他の建物には畳の道場など様々な練習場があります。

幼少期編 第二話 裏

「そうだよ、これだよコレコレ、コレが物理法則だよ。子供助けようとして車に轢かれたら普通に死ぬよ。あれ？でも生き返った後探偵やってるぞ？まあいいや」

「ぐすつ、悟ー鍵開けてよー。じゃないとお母さん泣いちゃいそうだよー」

既に泣きながら扉に縋り付く精神年齢が若干退行した妻に、返事をせず部屋に引き籠り明かりもつけずにずっと独り言を言い続ける息子。

「はあゝ」

そんな二人を見ながら一家の大黒柱である武は溜息を吐いた。

いつも本ばかり読んで外に興味を持たない息子を説得して、週の半分は出掛けさせることを約束したのが一昨日。

これを機に少しでも外に興味を持つてくれればいいと考えての事だったが、その試みは初日で失敗してしまった。

なんでも悟は先日河原で人が車を片手で止める現場を目撃したらしいのだが、「それが普通か？」という問いに対して、それを行ったのは鉄心さん辺りだろうと思い「『あの人達なら』まあ普通だな」と答えてしまっただけが大変。

昨日は夕食も食べずに寝た息子を心配し、朝起きたら隣に妻の姿が無かったので様子を見にくればこの状況である。

普段クールな妻をここまで取り乱させる息子に少し嫉妬を覚え、まるで子供のようにだと武は自嘲しながらも目の前の状況をどう打破しようか考える。

いつそのこと扉を蹴り破り無理矢理外に連れ出す、という考えが武に浮かんだがかえって状況が悪化しそうなのですぐに却下。

無理に連れ出すよりは時間をかけて落ち着くまでは待った方が良さだろう。

そう考えた武はまずは妻を落ち着かせることから始めることにした。

「落ち着けつぐみ」

「武い、悟が反抗期だよー」

肩に手を置き落ち着かせようと優しく声をかけると、つぐみは勢いよく振り返り武の腰に飛びかかるように抱き着いた。

「おー、よしよし」

抱き着いてくる妻を受け止め、子供をあやすように頭を撫でる武は「しばらく悟には何を言っても無駄だろう」と言い、つぐみに食事の準備を頼む。

暫く渋っていたつぐみだったが、「多分悟もお腹空かせているぞ」と武が付け加えると渋々とキッチンの方へと去って行った。

「さて」

つぐみがリビングに行ったのを確認し、武は改めて扉に向かい合った。

悟が何故引き籠っているかは大体の見当が武にはついていた。

今悟が引き籠もっている原因は自分が想像していた世界と現実とギヤップだろう。

たまにいるのだ、他所からこの街に来て余りの非常識っぷりに混乱する人が。

そりゃ人が空を飛ばされたり水の上走ってる光景を見た日には、それが夢か自分の目の心配をするのが普通の反応だ。

でもそれは大抵大人であって子供、それも悟位の年齢ならすぐに受け入れる事が多いのだが。

「悟、そこの大人より大人びてるからなあ」

様々な物語を読み、様々な人、様々な価値観をフィクションとはいえ学び、体は子供頭脳は大人！とまではいなくても中学生位の常識を持っていた悟はすぐに受け入れることが出来なかった。

「こんな事なら川神市についてもっと説明しておくだった」

と武は自分の短慮に後悔する。

川神院のビックリ人間ショーを見れば外への興味が増すのではないか、とも考えていたのだが今回は完全に逆効果だ。

「はあ、駄目だ何も思いつかん」

打開策がいつまでたっても思い浮かばないので、仕方なく武もリビングに向かうことにした。

「なんかいい方法ないもんかな」

ソファーに倒れこむように座りながら、卵を溶いているつぐみへと視線を向ける。

「あなたが高校生の時に川神市に来たときはすぐに馴染んだのにね」

「そりゃ俺は頭の柔軟性が売りですから、にしても我が息子ながら頭が固い・・・つぐみに似たんじゃないのか？」

「どう見ても武に似たわ。頑固な所とかソツクリ」

つぐみが卵を溶くのを中断し、クスクスと笑うと武は拗ねたように「うっせ」と言い再び息子を部屋から出す方法を模索する。

武が川神市に来たのは9年前の高校入学の時だった。

当時は体を鍛える目的で川神院の門を叩いたのだが、院長である鉄心や当時は師範代候補だった釈迦堂には武も最初は自分の目を疑ったほどだ。

しかしその日に数時間の体験を受け、入門を決めて帰宅する頃には完全に順応していたのだが。

そんな自分の体験の元、息子なら自分のようにすぐに慣れると思っただのがそもその間違いだった訳だ。

息子の性格を把握しきれなかった自分の落ち度だと武は悔やむ。

「どうしようかしら？そういえば、鉄心さんにお孫さん居るし」

武の頭の中に活発な女の子の姿が浮かぶ。

「百代ちゃんか、あれは鉄心さん以上の武術家になるよ　そう
か、そういえば悟と歳近かったな」

「悟の一つ上よ。川神院とは近いから同じ小学校に行くでしょうし、
あの歳でもう中位の門下生と渡り合える百代ちゃん見たら悟どうな
るかしら？」

「学校で見かける度にああなったら流石にマズイ。　というか面倒く
さいぞ」

そもそも川神院と自宅は近いから昨日みたいなことを何度も目撃す
る可能性も高い。

次から次へと出てくる問題点にゲンナリとしながらも、武は解決策
は何か無いかと考える。

「もういつそのこと川神院に預けちゃおうかしら？　なーんて」

と自分でも駄目な手だとすぐに分かる事につぐみは笑う。

しかし

「それだ」

指をパチンと鳴らしながら武は考えもしなかったとバツと顔を上げ
た。

「非常識　慣れてしまえば　当たり前　by 識丈武」

簡単な話だった。

常識という固定概念に捕らわれてるから駄目なのだ。

「とびつきの非常識に放り込んで一度悟の常識をぶち壊してしまえばいい」

ようやく納得できる解決策が出来た、と武は満足したようにソファに背中を預ける。

その時、タイミング良く二階の窓が開く音が聞こえてきた。悟もようやく立ち直ったらしい。

「そうと決まれば鉄心さんに連絡だな」

と携帯を開く武。それに対してつぐみは心配そうな顔をするが、他に手も無いので武に任せるのだった。

幼少期編 第二話 裏（後書き）

といった感じにお送りした第二話「裏」でした。

前回がいつもの倍程の量になった反動か今回はいつもの半分程度の量です。なので次の更新は明日にします。

普段は夜に書き上げて一晩寝て休んだ頭で見直して、おかしいな！と思うところを書き直してから投稿するのですが、今回は昼間のうちに一から書き始めて完成してしまったのでいつもより内容が酷いかもしれません。

いつも酷いじゃん。って思う人はごめんなさい。
精進します。

次回はお待ちかね、主人公VS百代です

幼少期編 第三話

綺麗な子だ。

目の前の少女を見て悟はそう思った。

自分と同じくらいの年齢の女の子だったら普通は可愛い、と言っべきだと思う。

しかし、彼女を見た瞬間真っ先に思ったのはそんな言葉だった。

理由なんて分からない。彼女の整った顔立ちは勿論のことだが、身に纏う雰囲気といったよく分からない何かが悟にそう感じさせたのだ。

何故彼女が自分の事を真っ直ぐ見ているのか、悟はすぐには分からなかったが、多分自分と同年齢の男の子が居るのが珍しいのだろうと考える。

女の子　百代は悟の顔をしばらくマジマジと見つめると、何かを思い出したような顔をし

「おい
」

悟に向かって声をかけようとして

「何をしとるんじゃあああああ！」

ゴキンッ！

という音と共に鉄心の拳骨が頭に炸裂した。

「痛う」

頭を抑えながら百代は床にしゃがみ込む。

何やら人の頭が鳴らしてはいけないような音がしたが大丈夫だろうか？頭の傷より前に脳の方を心配したくなるような音だった。

と思いながら悟が周りを見回すと鍛錬をしていた他の人たちも全員手を止め、その光景を見守っていた。

いたのだが

「これは、百代殿と鉄心殿の組手が見れるのでは？」

「おお、それは僥倖。しっかりと拝見させて頂きましょう」

「ここ数日は見ていなかったからなあ、楽しみだ」

ヒソヒソと話し合う門下生たちの顔には特に心配するような表情は無い。

両親を見ると、二人とも見物するような目で見ており、どうやらこの道場内で目の前の事に心配しているのは自分一人だと悟は気づい

た。

とそこで

「何すんだジジイイイイイイ」

部屋を震わせるほどの大声を発しながら、涙目になった百代がいきなり立ち上がり鉄心に殴りかかった。

先ほど組手で男性を吹き飛ばした時よりも遥かに早い突きだ。信じられないことに百代はアレでも手加減をしていたらしい。

しかしそれを鉄心はゆうゆうと片手で受け止め、空いた方の手で再び百代の頭目がけて拳を振り落す。

「道場を壊すな！いつも言っておるじゃろう！」

「道場がモロいんだよ！私のせいにするなジジイ！」

それを迎え撃つ様に繰り出された百代の拳と衝突した瞬間、広い道場内を突風が吹き荒れ、二人の居る場所を中心に床がしなる音が伝わる。

それを見た門下生の多くは、少しマズイと感じたのか道場の外へと退避を始め、残った少数の者は道場の隅に固まり何やら小さくブツ

ブツつぶやいたかと思うと

「『波ッ！』」

という掛け声とともに、道場全体を薄く輝く壁が張り巡らされる。少しでも道場への負担を減らすために張られた結界だ。

そしてそんな事を知らず、今日何度目になるかも分からない思考停止状態に陥っている息子を引きずりながら、武はつぐみと共に結界を張っている門下生の所に移動する。

門下生のすぐそばまで来ると先ほどの風が嘘のように止まる。結界を張っている門下生を守るための結界の中に入ったからだ。

鉄心と百代の二人が拳を打ち合わせるたびに大きな音と共に衝撃波と風が生まれ、それはどんどんと激しくなっていく。

そんな突風の発生源を呆然と見ながら悟は少女と目を合わせたときに思わず高鳴った胸の鼓動などとうに忘れていた。

「それよりジジイ！昨日私のアイス勝手に食っただろ！」

「二つもあれば一つは儂の分じゃと思うじやろうが！余った方を食べた釈迦堂君に文句を言いなさい！む、釈迦堂君の姿が朝から見えないのはそのせい」

「隙アリッ！」

「ぬっ！？甘いぞ百代」

子供のような言い合いをしながらも、残像が見えるほどの速さで打ち合う二人を見た周囲の反応は三通り。

目の前で繰り広げられている戦闘に感嘆の息を漏らし目を奪われている者。

またか、と溜息を吐きながらも止める方法がないので成り行きを見守っている者。

そして我に返り、この場から一刻も早く逃げ出そうとロープを噛み千切ろうともがいている悟だった。

前歯奥歯系切り歯。自分の持つすべての歯を使って悟はロープに噛り付く。

しかし、子供の顎の力で噛み千切れるような細さではなく、顎と歯茎が猛烈に痛む代償を払ったにしてはロープの表面を少し削る程度という些細な結果に終わった。

噛み千切るのは無理と悟は判断し何か刃物は無いか、と周囲を見回すと壁に薙刀や刀が立てかけてあるが恐らくはレプリカだろうし、そもそも自分の手の届く場所ではないと諦める。

更に言えば、仮にロープを切れたとしても結界の外は恐らく人が吹き飛ばほどの風だ。出口まで無事にたどり着けるとは限らない。

ロープからの脱出。二人の組手(?)を止める。

最低でもこの二つの条件を満たさなければここから逃げるのは不可能。

何か手は無いか、悟がそう思った時だった。

「やーめーなーさーい！」

百代と鉄心の間に緑色のジャージのようなものを着た人物が割り込んだ。

その人物は再び突風を生み出そうとする直前の二人の拳を飛び蹴りで弾き、くるくると回転しながら床に着地した。

あの二人の間に割り込める当たり、一般人ではないがそんなことは悟にはもはやどうでも良かった。

水を差された二人は構えこそ解いてはいないものの、一先ず戦う手を止めそれにより突風は収まっている。

あの人物が誰にせよ脱出条件の一つはクリア。後の問題は自分に巻かれているロープのみ。

「鉄心さん、アナタまでムキになってどうするんですか！」

「しかしのうルー君。最初に原因を作ったのは百代の方じゃよ」

「子供みたいな言い訳をしないで下さい！周りを見てください、道場酷いことになってますよ！」

悟が両親に目を向けると、幸いにも武とつぐみは三人の方を見ていて悟が逃げようとしている事に気づいていない。
今こそが絶好のチャンス。

「何か手段は無いか。早くしないと俺の精神力が持たない。こんなマンガみたいな空間から脱出する方法は あっ」

とそこまで言いかけた武は自分の今言った言葉を反復し

「試してみる価値はあるか」

一つの方法を頭に思い浮かべた。

武とつぐみは目の前で言い争っている三人を静かに見ていた。

「全く、鉄心さんもルーさんも変わらないなあ」

懐かしい光景だ、と武は目を細めながら呟く。

「ふふ、これであそこに釈迦堂さんが居れば 」

「状況が悪化するのでは間違いないな」

武とつぐみが川神院に居た頃にもこんな光景は何度も起こり、それを二人は目撃していた。

と言ってもいつもは武術に対する解釈の違いから釈迦堂とルー対立し、それを鉄心が仲裁に入るというもので今回は配役が違うが。

「分かったルー君。反省しとるからもう許してくれんかのう」

「私も反省するからお説教は勘弁してください。耳にタコが出来そうだ」

鉄心と百代もルーのお説教の勢いに押され既に戦意を無くし、拳を収めている。この半分乱闘騒ぎもこれで終わりだろう。

そこでふと武は、そういえば息子はどんな顔をしているのだろうと考え、あることに気づいた。

先ほどまであったはずのロープから伝わってくる手ごたえが今ではないことに。

「まさか!?!」

振り返った武が目にしたのは想像通り、所々表面がボロボロになっているが切れている様子もなく、解かれてもいないロープ

そして

出口へと爆走する息子の姿だった。

side 悟

出口に向かって一直線にひたすら走る。

もつと抵抗しておけば良かった、と心の中で後悔する。

女の子が自分の倍ありそうな成人男性吹き飛ばす？ありえない。昨日のトラック事件位ありえねえ。

道場の風景見て『これくらい頑張って修練積みめばトラックくらい止められるかなー』なんて少し納得してた五分前の俺ふざけんな。どんなに頑張っても越えられないから限界って言葉があんだよ。

しかも生身の拳と拳ぶつかり合って風生まれるとか何処のバトル漫画だよ。最近の少年誌でもそんなインフレしばらく起こってねえよ。しかも拳句の果てには結界張るとかどこのファンタジーだコノヤロ！。

それにしても漫画で読んだ縄ぬけの術が実際に使えて助かった。読んだときには人間の体じゃ出来ねえよ！って思ったけどやれば出来るもんだ。お蔭で今体中滅茶苦茶痛いけど、ありがとう漫画家の先生。

「逃がすかあああ！」

背後から地獄の底から響くような唸り声が聞こえてくる。
もしかしくなくても確実に父さんの声だ。

しかし、もう遅い。一度道場から出てしまえば廊下は避難した門下生が大勢いる。

いくら父さんが人外の速度で移動できても障害物が多ければそれも発揮できまい。そして俺は体が小さい分障害物の間を走りやすい。

「これは逃走ではない、自由を勝ち取るための闘争だ！」

どこかで聞いたようなセリフを叫びながら道場から転がり出る。
突然飛び出してきた俺に気づいた数人の門下生が驚いたような顔をするが、それに構わず門下生の群れの中に飛び込んだ。
思ったより狭いがこのくらいなら問題なく走れる。

「すまない！退いてくれ！」

後ろから聞こえる父さんの声はどんどん遠ざかっていく。ある程度距離を離れたらどこか部屋に飛び込んでやり過ごそう。

そう思った時だった

「ええい、メンドクセエ！！」

ダンッ

という音と周りがおお、とどよめく声が聞こえて振り返るととんでもない光景を目に入った。

「なっ！壁を走ってるだ！？」

門下生にぶつからないように天井付近を走って追いかけてくる父さん。

なんだこのホラーは。

人外ここに極まれり。母さん、俺はもうあの人を人間と見れそうにありません。

しかしこの状況はマズイ。

父さんは完全にこっちの姿が見えてるから部屋でやり過ごすことは出来ないし、かといって障害物のない場所に出てもすぐに追いつかれる。

「どうする？」

そう考える間にも人の隙間から開けた空間が見えてきた。来るときに歩いてきた距離を考えると、この人垣から出ればすぐ出口だ。

逃げ場のない部屋か、すぐに追いつかれる外か
どちらを選ぶ。

「諦めてたまるかああああ」

門下生の群れから出ると同時に全力の一步を踏み出し靴なんて履いている余裕なんてない、と裸足で野外に飛び出す。
着地すると、とがった石が足の裏に食い込み足に痛みが走るがこの際無視。

そして

両手両足を地面につきその場に急停止して振り返る。

振り返った先には俺を捕まえようと手を伸ばし、予想外の出来事に驚く父さんの姿があった。

逃げる事も隠れることも出来ないなら、追いかける人を潰せばいい。

父さんの腕は先ほどの二人の打ち合いとまではいかずとも、俺には反応するだけで精いっぱい速度だ。

しかし、いくら速い拳動でもそれが自分の目に見えるレベルでくるタイミングさえ分かっていたれば防ぐ事は十分可能。

迫る腕を全力の力で弾き、体勢の崩れた父さんに飛びかかる。
狙うは顎。

こんな奇襲が通用するのは一度きり。だからこの一回で確実に短時間でも行動不能にしなければいけない。

空中で体のバネを限界まで使い、渾身の力を込めて拳を突き出す。

しかし

「当たるかそんなもん」

父さんはそれを最低限の動きで避ける。

「予想通りだ」

拳を父さんの鼻先を空振りすると同時に開く。

その中から出てくるのはさっき急停止するために手を地面につけた時、握りしめておいた砂だ。

そもそも顎にクリーンヒットしたとしても子供の腕力で大人を、それも父さんをノックアウト出来るといふ保証は無い。

だから本命はこっち。目を潰しても追いかけてくる事は出来なくなる筈。

「まだまだ甘え」

しかしそれも届かない。

既に体勢を立て直した父さんは、弾かれていない方の腕で目を完全にガードする。

結果砂は父さんの目には届かない。

囀は通用せず本命も届かなかった。

この状況はマズイ

「これで終いか？さと

ふが！？」

この手段だけは絶対に取りたくなかった。

父さんがその場に受け身も取らずに倒れこむ。

真っ青な顔は苦悶の表情で染まり口の端からは泡が溢れていた。

視界の隅では俺の鬼畜の行いに門下生までもが顔を青く染め、数人は自分の下腹部を押さえてまるで痛みが伝わっているかの様に悶えている。

そう、俺がやったことは単純。

目潰しで視界を封じた俺は、無防備な父さんの股間を全力で蹴り上げたのだ。

「この技だけは使いたくなかった」

頬を涙が伝うのを感じる。

本命が届かなかった場合の最終手段。

その威力や目の前の父さんが示すとおり、人外一人沈めるほどの威力だ。しかし、自分にも精神的なダメージ帰ってくるのが難点だ。

自分にされた場合を想像し思わず身震いしながらも倒れた父さんに背中を向け。

「すまない、つぐみ。二人目は作れないかもしれない」

父さんの悲痛な言葉から逃げる様に走り出した。

十分前の記憶を頼りに走っていると、ほどなくして正門が見えてきた。

何はともあれこれで自由だ。

最大の障害を乗り越えた俺の目の前に邪魔する物は何もない。

早く帰って今度は川神院とは真逆の方向に出かけよう。まずは公園を探して同年代の子供を見つけて声をかけるのが良い。

日が落ちるまで楽しく遊んだあとは「また明日」って言いながら別れるんだ。そうやって少しずつ友達を増やしていこう。

もしかしたら俺のように物語が好きな子がいるかもしれない。お互い好きな話を教え合ったり、語り合ったり出来たら最高だ。

想像すれば想像するほど明るい未来が見えてくる。

「おい、」

だから

「お前面白いな」

そこを退いてくれませんかね？

お嬢さん

幼少期編 第三話（後書き）

謝罪という名の言い訳。

前の話で「明日更新する」と言っておきながら更新できなくてすいませんでした。

夜中バイトから帰った時にはクタクタで、ソファーの上で目を瞑ったら次の日の朝になっていたという次第です。

そしてもう一つ。

同じく前の話で「今回は悟VS百代です」と書いておきながら結局そこまで行かず、なぜか父親VS悟になってました。

楽しみにしていた人は本当にすいません。

さて、今回の話では悟の人外っぷりも結構見えてきたのではないかな、と思います。

作者自身もどうやってぐるぐると胴に巻かれたロープを切断や結び目を解かずにかつ短時間で脱出したのか見当もつきません。少なくとも関節外すくらいじゃ抜けないのは確か。

悟が漫画で読んだ方法は、現実ではまず実践不可能なトンデモ理論です。そしてそれを実行した悟は間違いなく人外の道に片足突っ込んでます。

次回あたりで周囲に悟の非常識っぷりが知れるかもしれません。悟本人はまず気づきませんが

幼少期編 第四話

川神院の正門。

俺が後少して自由を掴めそうなところで、最後の最後でボスがやってきた。

父さんがラスボスとしたら裏ボスってところか？

少女の4mほど近づいたところで立ち止まる。

どうする？

相手は女の子。無視して強引に抜けるか？

無理だ。

彼女の実力は先ほどの道場内の一件で分かっている。真正面から向かって抜けるのはほぼ不可能だろう。

かといって父さんにやったように不意打ちして逃げるのも却下だ。女の子相手に手を上げるのも俺の良心が絶対に許せない。

じゃあ一度院内に戻るか？絶対に嫌だ。折角出口まできたんだ。もうあそこには一秒も居たくない。

「すいません、そこ退いて貰えますか？」

だから俺に残された手は話しかける事しか残っていない。父さんと違って彼女は悟を捕まえる目的は無いはずだ。強引な手段を取ってまで引き留めようとは思えない、と思いたい。

「百代だ」

「モモヨ？了解って意味ですか？」

「川神 百代、私の名前だ」

まあそうですね。

「百代さん？そこを退いてくれるとすっごく嬉しいんですけど」

「お前の名前は？」

「あー……聞いてますか？」

「名前は？」

「えーつと……」

「なーまーえーはー？」

「……識丈 悟と申します」

駄目だ。この御嬢さん話をお聞きになりやがらねえ。

これが噂の無限ループか。体験したのは初めてだけどコレもの凄いいメンドクサイ。

「そうか、悟か。いい名前だな。両親に感謝しろよ」

そりゃどうも。褒めるついでにそこ退いてくれたら最高なんですけど。今退いてくれるなら永遠の愛も誓えるよ？割と本気で。

「それで、百代さん。ちょっと急用があるから帰りたいんだけど退いてくれませんか？」

「お前武術の経験は？」

質問を質問で返すなどと言う以前に話が噛み合っていない。

会話のキャッチボールってよく言うけど。投げ返さないんじゃないくて球捕ろつとすらしてないよこの人。

「えーっと話が見えないんですが？」

「さっきの道場の前で見た動きは中々見事だったぞ」

「俺早く帰りたいんですけど」

「私の同じくらいの年齢であの動きをするヤツは久々に見た。というかお前で二人目だ」

「もしもし」

何か目瞑りながら腕組んで語りだした百代さん。そういう事は部屋で一人でやって欲しい。

「一人目は揚羽さんっていう人でな。これがまた強い上に綺麗な人なんだ」

「じゃあさようなら」

もう我慢の限界だ。

目を瞑ってるうちに通り抜け

「まあ、待て」

ガシッ

ようとするのを肩を掴まれて止められる。

「一体何が望みなんですか？他人にあげる程お金も持っていないければ、誰かが欲しがるような珍しいものも持っていないせん。そもそも欲しがってくれる友達もいません。」

悩み事の相談を受けれるほど人生経験豊富でもありませんし、貴方と共通するような趣味も多分持ってません。そんな俺に貴女は何をして欲しいんですか？」

余りのしつこさに少しキツメに言ってしまったが、向こうが原因なんだ。俺は悪くない。

「そうカリカリするな。将来ハゲるぞ？」

友達が

「その友人一人の所為でストレス溜めこむ位ならいくらでも友人の頭髪を犠牲に捧げます。だから家に帰らせてください」

そもそも友達まだ居ないんだよ。

「そんな冷たい事言っな。友達出来ないぞ？」

「そんな冷たい事言っても気にしない友達を作りに行きたいので早く手を放してください」

「もしかして友達がいらないのか？なら私が友達になってやろう。喜べ、こんな美少女が友達第一号だ」

「結構です。俺シャイなんで美少女が目の前に居ると全力で逃げ出したくなるんですよ。だから視界から消えてください」

「私の言うことを聞いてくれたら消えてやらんこともないぞ」

何でこの人は初対面なのにこんな上から目線なんだろう。器がデカいのかそれともアホなのか。

出来れば前者であって欲しい。これでアホじゃなかったらまだ見ぬ本物のアホに拒否反応が出来そうだ。

ともあれ、下手に話を引き延ばすよりはさっさと要求聞いて消えて貰った方が良いだろう。

「3分以内に済む用なら聞きましょう」

これが最大の譲歩。とは言っても拒否されたら俺に成す術ないのだが。

門に来てから1分。まだ父さんは悶絶している最中だろうか？

もしかしたら父さんも、俺が既に家に帰ったと思って諦めたかもしれない。

いや、「かもしれない」は駄目だ。もしかしたら諦めないで復活次第追ってくる「かもしれない」。家に帰るまでは油断しないでおこう。

「そうか。なら問題は無いな」

どうやら3分以内に終わる内容のようだ。

だるまさんが転んだを1ゲームだけとかだったらいいなあ・・・

嬉しそうな顔をしながら百代さんがウンウンと頷く。

そしてその口から内容を

「私と闘 「全力でお断りします！」

言い切る前に声を被せる。

言わせる前に言え。相手に自分の拒否意思を伝える一番手っ取り早い方法だ。ほぼ間違はなく自分に対する印象を悪くするが。

「却下だ。約束は約束だ」

「俺昨日まで殆ど家に出た事の無いモヤシっ子ですよ？そんな人間が貴女達みたいいな人と戦えるわけがないでしょう」

「勿論手加減はする」

「手加減してもヒグマ位倒せそうな人が言っても全然安心できないんですけど」

最低でも人間が勝負できるくらい手加減をしてほしい。

え？お前の実力に合わせるって？俺の実力なんてその辺の野良猫にも負けるレベルですよ。

「勝負の内容は簡単だ。お互いの体に先に一撃入れた方の勝ち」

「まだやるなんて言っていないんだけど・・・」

自分の体に一撃入れて、はい終わり！って訳にはいかないかねえ・・・
・ いかないよなあ・・・

まあそれほど悪い内容じゃないと思う。

わざと一撃貰ってさっさと終わらせよう。流石に死にはしないだろう。

「はぁ・・・分かりました、早く始めて下さい」

「その前に、ホレ」

百代さんが俺に何かを投げつける。

受け取ってみると、それは俺の靴だった。

「裸足じゃあ戦い辛いだろう？」

心遣い感謝しますよ。足の裏血だらけになるのは勘弁だ。

靴を履き、立ち上がるとその場で百代さんに向かい合う。

構えなんて分からないから両手を前に出しただけのよくあるファイティングポーズ。

それに比べ向こうは堂が入ったものだ。素人の俺にも隙がないことが分かる。

「じゃあ始めるぞ。合図は この小石が地面についたらだ」

百代さんが小石を空に投げる。

小石は少し間を置いて地面に落ち、それと同時に百代さんの姿がブ
レた。

鋭い踏み込みで俺の懷に潜った彼女は、目にも止まらぬ速さで拳を
俺の顔に叩きこむ なんて事はせず

「あー・・・、来ないんですか？」

1歩も動かずこちらの様子を見ていた。
何かふっふっふ、と勝ち誇った顔で笑ってるのが凄いムカつく。

「そうだな、お前こそ来ないのか？このままじゃ帰れないぞ？」

なるほど、このアマ最悪な事考えやがる。
俺がわざと攻撃を受ける事を見越して自分からは一切手を出さない
つもりか。

だけど残念。

その作戦には決定的な穴があるのだよ。

そのまま向かい合って10秒経過

「おーい、かかってこーい」

30秒経過

「帰りたくないのかー」

45秒経過

「むー・・・」

一分経く「ええい！まどろっこしい！！」

ほら予想通り一分と持たずに突っ込んできた。

短気なくせして忍耐強さが必要な作戦立てるからこうなる。

百代さんが軽いジャブを俺の顔目がけて放ってくる。

ギリギリ見える位の速さに抑えているのは流石だ。本当に俺の實力を把握して手加減してくれてるようだ。

これに当たればおしまい。家に帰らせてもらえる。でも今日は友達作りにいけそうにないかな？顔を少し腫らせてるヤツなんて相手からしたら抵抗あるだろうし。

多分当たったら痛いんだろうなあ、軽いタンコブ位は出来そうだ。

今まで家に引き籠ってたから怪我らしい怪我なんてタンスの角に小指ぶつけた事くらいしかないし。

拳がもう視界を覆うくらい迫っている。そういえば目に入ったら大

変じゃないか。目を瞑ろっ。

そう思った時。

パンッ

「えっ？」

聞こえてきたのは俺の間抜けな声。そして目に映ったのは

「やっぱり」

「

心底嬉しそうな顔をした百代さんだった。

顔に痛みは無い。でも百代さんが寸止めたわけでもない。俺に当てる気だったのは確かだ。

残る可能性は一つ。百代さん以外の誰かが止めた。じゃあ誰が止めた？

一人しかいないじゃないか

俺だ。

百代さんが再び迫る。

右、左、左、左、右、左

絶え間なく飛んでくる拳。全てが俺の反応ギリギリの速度であるソレを両手が勝手に捌いていく。

突きをそらし、蹴りを躲し、受け流し受け止め弾いていく。

武術なんてやっていない俺が、本来自分には到底敵わない相手の攻撃を受けきっているという事実に驚く。

そして気づいてしまった。

信じられない、信じたくないが俺はどうやら

ヘタレらしい。

だってそうだろう？ たった一回痛いのを我慢してしまえば解放されるのに、俺の意思とは裏腹に体が全力で回避を続けるのだ。家に帰りたい、でも痛いのも嫌と。これをヘタレと言わずしてなんという。

攻撃を受け切れてるのはきっと火事場の馬鹿力の親戚みたいなものだろう。

人間追い込まれると普段以上の力を発揮すると言っが、まさかこの歳のこんな事になるとは思わなかった。

しかしどうする？

このままじゃ俺が提示した三分が過ぎてしましそうだ。少しくらいならオーバーしてもいいけどなるべく早く帰りたい気持ちは変わら

ない。

方法はある。俺が百代さんに一撃入れればいいのだ。

不可能って程じゃない。

百代さんは最初から俺が反応出来るレベルの攻撃に実力を抑えてくれている。

だから多分、防御に関しても俺の攻撃が通用するレベルにも抑えてくれていると思う。

希望的観測だろうがなんだろうがやらないよりかはマシだ。
勿論本当に攻撃する訳じゃない。当たる直前に勢いを殺して寸止め、もしくは触れる程度にする。これなら大丈夫。

「せい！」

百代さんの攻撃が弱まったタイミングを見計らって、拳を繰り出す。ずっと受けに回っていた俺が突然攻撃したことに、百代さんは驚いた表情をするがすぐに真面目な顔に戻りそれを防ぐ。

「やっとやる気になったか？」

「多少はね！」

右から飛んでくるフックを頭を下げたて躲し、それを見越して繰り出された膝を横に飛んで避ける。

お返しとばかりに見よう見まねの蹴りを出す、百代さんは体を後ろにズラす事で避け、拳の雨を俺に降らす。

「やっぱりお前面白い！面白いぞ！」

何か百代さんが言っているが答える余裕なんてない。矢継ぎ早に飛んでくる攻撃を防ぐだけで精一杯だ。

合計24の拳を全て受け切ったところでようやく攻撃の手が休まり

「ほら！休んでる暇は無いぞ！」

槍のように突き出された足が飛んできた。

受け止めようとしたら体ごと吹き飛ばされそうな蹴り。

俺の体はいつものように勝手に受け流そうとして

受け流そ

うと添えた手が大きく弾かれた。

「っ！！」

蹴りは一直線に俺の腹目がけて飛んでくる。

それを当たたるギリギリのところで体を無理矢理捻りなんとか回避に成功する。

マズイ、無理矢理避けたせいで体勢が

「楽しかったぞ、またやろうな」

回避不可能な突きが顔に迫る。

弾かれていない方の手で何とかそれを受け止めるが、ただの悪あがきだ。

もう片方の拳がさっきと同じコースで飛んでくる。

どうしたらコレを避けれる？どうやったらコレを防げる？

そこで俺は気づいた。

いつの間にか、どうすればこの突きを防ぐことが出来るのか考えている事に。

いつの間にか、体が勝手に動いていたのではなく、自分の意思で百代さんの攻撃を防いでいたことに。

馬鹿な話だ。

家に帰る邪魔をするなど何度も言っておきながら、この瞬間俺は自分の意思で戦いを長引かせていたのだから。

やけに飛んでくる拳が遅く見える。

いや、それでも十分目で追うのがやっとの速さだけど、何故かそう感じた。

人は死ぬ直前に見えるものが遅く見えるというが、それに近いものだろうか？

でもまあ関係ないか。どうせ避けられないものは避けられ

『避けれる』

そんな単語が頭の中に浮かぶと同時に、俺の中にそんな確信が生まれた。

拳が俺の鼻っ面に触れるまで数センチ。瞬きする間もなく拳は俺の顔に当たる。

どうあっても防げるはずはない。

なのに

気付けば俺は、百代さんの真横に移動していた。
百代さんの突きは俺とは50センチ以上離れた場所の空気を切り裂くだけに終わる。

勝ちを確信したとき、人は一番油断をする。どこかで読んだ本に書いてあったことだが、今の百代さんはそれ。
絶対に避けられると思っていなかった突きが外れた事に驚き、体を硬直させている。

俺はそんな彼女のわき腹に拳を叩きこもうとして

「カハッ！！」

吹き飛ばされた。

余りの衝撃に肺の中の空気が全て叩き出され体が宙を舞う。そしてその直後に来るのは体全体に伝わる二度目の衝撃と砂の味。

最初、一体何が起こったのか分からなかったがすぐに道場で見た光景を思い出す。

そういえば、道場で彼女と闘っていた時はこんな感じだったな。と攻撃なんてする素振りを見せてなかったのに、いつの間にか相手が吹き飛ばされている。

それほどに速い動きでの一撃。
今なら吹き飛ばされてた人の気持ち良く分かるわ。

これズルい。
つか手加減してくれるんじゃないかなかったのかよ。約束守れって言う割に自分は守ってないじゃん。

そんな言葉を最後に俺の意識は徐々に闇に沈んでいく。

最後に見たのは誰かが慌てて駆けつける音と
しそうな百代さんだった。

やっぱり嬉

幼少期編 第四話（後書き）

やばい、戦闘描写がここまで難しいとは・・・

これでも6時間近くかけて悩みながら書いたんですが全然ダメですね。

何か重要な表現いくつも抜けててダイジェストみたいになってる気がする。

でもやっぱり戦闘シーンを書いているのが一番楽しいです。

好きこそもののなんとやら。色んな作者様の作品を読んで勉強します。

幼少期編 第四話 裏

side 百代

ソイツはその日突然現れた。

最初見たときは私くらい歳の男が道場に来るなんて珍しい、多分入門希望者だろうとしか思わなかった。

でも、一緒に居る人には見覚えがあった。

確か武さんと呼びよさん。昔川神院に居た人で爺達と仲が良かったまに遊びに来る人。私も何度か話したことがある。ということと一緒にいるのは息子さんか？

少し気になったから声を掛けようとしたのに、爺のヤツが邪魔したせいで出来なかった。

確かに道場壊したのは悪かったさ！でもイキナリ殴ることないだろ！

でもまあ、最近では中位の門下生も相手にならなくなってきたて少し退屈だったから爺と戦えたのは楽しかったな。手加減されているのはちょっと悔しかったけど……。いつかは本気を出させてやる！

今日戦った人も、数か月前は良い勝負を出来たのに今じゃ倒すのに数秒とかからない。

別に相手が弱いわけじゃない。私の才能が異常なのだと、爺はよく言う。

後数年すれば、師範代と爺以外で私の相手を出来る人は川神院には居なくなると、釈迦堂さんが言っていた。

結局爺との戦いはルーさんに止められてしまったけれど、満足だ。後で荒れた道場の片づけ爺としろって言われた時は思わず爺と一緒に文句を言ってしまったけどそれでも満足だ。というか爺、その歳で「えー」は無いと思うぞ。

そこで、何やら負の気がこもった声を聞こえてきたからその方向に目を向けると、何故か出口に向かって逃走している武さん達の息子（仮）とそれを追う武さんが居た。理由は分からないけど面白い事になりそうだった。そう思った私は止めようとするルーさんを振り切って二人の後を追った。

二人の廊下で見せた動きは中々のものだった。門下生の間を素早く走り抜ける息子（仮）に壁を走って追いかける武さん。確かあれは気を使った移動法の応用だったか？私にはまだ出来ない技だ。

道場の外に出た後も面白かった。

逃げるのをやめた息子（仮が）武さんに素人とは思えない素早い突きを放った。何か武術をやっているのだろうか？

でもそれを軽々と避ける武さんも出来る。

と思ったら空ぶриした拳から出てきたのは目つぶしの砂。息子（仮）は最初から当たるとは思ってたなかったらしい。でもそれも完全に防いだ武さん。

しかし、それも読んでいたかのように息子（仮）は武さんの金的を蹴り上げた。

周りを見ると門下生達が呻き声をあげながら目を逸らしていた。

女の私には分らないがアレは相当きついらしい。組手の時は攻撃が禁止されている部位だからやっぱり痛いのだろう。

そんな事を思っているうちに息子（仮）が門に走って行ってしまったので追いかける。裸足じゃ帰るのにも困るだろうから靴くらいは持って行ってやろう。

茂みを飛び越えたり抜け道を使ったショートカットをして門に着くと、丁度息子（仮）がやってくるところだった。

息子（仮）は私を警戒しているように見える。まあ先回りされていたら当然か。

早く帰りがっているアイツにいくつか質問をした。

名前は識丈 悟と言らしい。

私がいろいろと話しているのに無視して帰ろうとするから、つい少し強引に引き留めてしまった。

すると悟は、さっきまでの丁寧な口調を少し荒くしながらも文句を言ってきた。こっちの方が素みたいだ。

しかし、友達になろうと言ったのに視界から消えてくれっていうのは少し酷いんじゃないか？確かに強引に引き留めている私が悪いけれど。

少しムツと来たので私は悟に少し意地悪をしたくなった。

私と勝負をしてくれたら帰ってもいいと。

一撃先に当てた方の勝ちだからそんなに時間もかからない。

悟は武さんから早く逃げたいみたいだけど、アレだけ綺麗に入った金的だ。あと5分は動けないから問題ないだろう。

靴を悟に渡して向かいあう。構えは全然なっていない。コレで分かった。悟は武術の経験は全くない。

という事は武術の経験のない子供が不意打ちとはいえ武術の経験のある大人を破ったことになる。

やっぱり面白い。そう思うと同時に悟に対しての興味がまた湧いてくる。

でも数秒経っても悟から仕掛けてくる気配はない。

多分道場で私の实力を見たから少し腰が引けてるのだろう。

でもそれじゃあツマラナイ。相手の实力を知るには実際に攻撃を受けるのが一番なのだ。

だから私も動かないことにした。

フッフッフ

これなら私に攻撃するしかあるまい！

なんて思ったら、悟のヤツ全く攻撃してこないじゃないか！これじゃあもつとツマラナイ！

作戦変更だ。私から攻撃して悟の動きをみるとしよう。

と言っても本当に殴るわけじゃない。

敵意の無い素人相手を殴るのは武術家として最低の行為だ。そんなの分かってるし、私もやりたくはない。

だから悟が避けられなくても、当たる瞬間に拳を止めてチョンと押す程度にするつもりだ。

攻撃を当てるという気迫「だけ」を込めた拳を悟に放つ。
でも悟のヤツ、完璧に見えているはずなのに防御どころか避けよう
ともしない。

予想外の反応に私が少し戸惑った時、当たる直前になって悟は私の拳を綺麗に弾いた。
驚いているのは悟自身。体が勝手に反応したのだろう。

「やっぱり」

「

思わず笑みがこぼれる。予想通り、いや予想以上の動きだ。

つい面白くなってどんどん攻撃の速度を上げてしまった。すると、今度は悟の方からも攻撃してきた。

当てる気がない一撃。多分私と同じで私を傷つける気はないようだ。

そこからは私も少しスイッチが入ってしまつて、気を使わない状態での殆ど全力の攻撃をしたが悟のやつ全部それを受け切った。

やっぱり戦うなら同年代のヤツと戦うのが一番楽しい。

でもそろそろ三分が過ぎてしまう。残念だが約束は約束だ。三分が経つ前に終わらせなきゃいけない。

私は悟には防げない蹴りで悟の体勢を崩し、その顔に突きを出す。
当てるつもりはないが、鼻先をちよつと小突いてやろうなんて思っていたら、そこで今までやる気のなかった悟の顔が諦めていない表

情に変わっている事に気付いた。出来れば最初からその感じに戦って欲しかったな。

ともあれこれで終わり。勝利を確信した私は完全に油断していたと言つてよかった。爺や師範代たちからは、戦いが終わるまで決して油断をするなど何度も教えられたのにも関わらず。

だから

拳が悟に触れる直前。

悟の体から急にあふれ出した気を前に、思わず止めようとした拳を振りぬいてしまった時はかなり焦った。

でも、一番驚いたのは。

私でも避けれるかどうか怪しいタイミングだった攻撃を避け、私の横にいつの間にか回り込み一撃を与えようとしたことだ。

反射的に気を使い、本気で迎撃してしまったときは本当にマズイと思った。

悟は10m近くを吹き飛ばされ、受け身も取らずに地面に叩きつけられた。

下手をしたら死んでしまったかもしれない。最悪の展開を予想して頭から血の気が引くのを感じる。

でも大丈夫だった。悟の気の量は全く変わっていない。

悟の気が体を守ったのだろう。

悟はプルプルと震えながら私を見て

「これズルイ」

と言うと意識を失って動かなくなった。

私は武術家として最低の行為をした。それを自覚しながらも顔が笑うのを抑えられなかった。

今の悟の攻撃は、真正銘私が全力を出さなかったら防げなかった。それが私を歓喜させる。

悟が気絶するのと同時にやってきたルーさんと爺が慌てて悟の容態を確認して、すぐに安堵した表情を見せた。

そのあと拳骨を4発も私に落とした爺は「後でお説教じゃ」と言い残して悟を院内に抱えて行った。

お説教は面倒だけど今回は全面的に私が悪いから仕方ないか。

それよりも悟には謝らなきゃな。面白いヤツだったから出来れば仲良くしたいし。

どうやって謝るか・・・

とりあえず、悟が起きるまでに考えておこう。

幼少期編 第四話 裏（後書き）

手抜きと言われればそれまで。下手くそと言われてもそれまでな文章だということは自覚しております。それでも頑張って書いたんです・・・orz

という訳でお送りした第四話「裏」でした。

今回は悟に興味を持った百代の視点からのお話。

前の話だけを読むと、百代さん我儘な悪い子というイメージがつきそうだったので少し焦りました。

感想でも書いたのですが、本作品はアンチ的な要素は入りません。

今現在主人公は川神院に対して少しアンチ的な考えを持っています
が、すぐにそれも無くなります。

アンチ展開を望んでいた方はごめんなさい。ぶっちゃけ次回の話で
主人公の考えはかなり変わります。

今回はプロローグを除くと過去最短記録。

多けりゃ良いってもんじゃないけど、もう少し量を増やしたいです。

幼少期編 第五話（前書き）

最近アクセス解析というものがあることに気づきました。

いつの間にか5万PV・一万ユニーク突破していたことにビックリしましたw

それだけ多くの人に見てもらえてとても嬉しいです。

見てくれた皆さんに感謝を（^人^）

幼少期編 第五話

目が覚めて最初に目に入っただのは何の装飾もない茶色い木の天井。普段は少し黄色のかかった白い天井が見えてくる筈なのだが、まだ寝ぼけて回っていない頭はそれを違和感と認識せず受け入れていた。

取りあえず何かして頭を起動させるか……。折角の木の天井だ。木目でも数えてみようかな……。やめておこう。

なんでそんな悲しい一人遊びをしなきゃなんのか、友達いないみたいじゃないか……。居ないけどさ

背中から伝わるベッドより固い柔らかい感触で、多分これは布団というやつだろうと判断する。

首を動かしてみると、分かり切っていたことだけどそこは自分の部屋ではなかった。

十畳以上はありそんな中々広くて立派な部屋だが装飾品は殆ど無く、家具も一切ない。せいぜい和室として最低限の威厳を保つために達筆な文字で「勇猛邁進」と書かれた掛け軸があるだけだ。

襖の向こうはすぐ外のように、小鳥のさえずりが聞こえてくる。

そういえば、どっかの本で読んだことがあったな。確かこういう時にはお約束があった筈。

「知らない天 「ん？起きたか？」

音もなく襖が開き、百代さんが入ってくる。

「ん？どうした？」

首をコテンと傾げてこちらを見る百代さん。

やばい、聞かれたか？いや、別に聞かれたところでなんの問題もないんだけどなんとなく恥ずかしい。

これはアレだ、以前部屋の中で気合入れて叫べば出せるんじゃないかと某衝撃波ビームを練習しているのを父さんに見られた時と同じ感じた。

その後父さんは「俺も昔やったもんだ」なんて慈愛に満ちた目で見ている。「アンタもやったんかい！」なんて羞恥心の余り当時は全力でツツコミを入れてしまったが最近の人外っぷりを見ると本当に出せるんじゃないかと思ってしまう。

話しが逸れた。これもアホな事言おうとした十秒前の俺のせいだ。

でもこれで現状はほぼ把握できた。

百代さんが居るということはここはまだ川神院だろう。

俺はすぐに布団から飛び起き、逃走を再開する　　よつな事はしない。

もういいや、疲れた。それに何故か、昨日まであった絶対に逃げるという意思がかなり弱くなっている気がする。

昨日あれだけ非常識なものを見せられたせいで少し耐性が付いたのかもしれない。

「おはようございます」

顔が少し熱いのを自覚しながらも百代さんに挨拶する。言った後に気づいたけど時間的にはこんにちはが正しいのかな？この部屋に時計は無いから確認できないけど今何時だろう？

襖の向こうから差し込む光からして、まだ夕方にはなっていないようだ。

「うん、おはよう。よろしい、朝の挨拶は一日の始まり。ちゃんとしなきゃな」

ウンウン、と百代さんは満足したように頷く　　ってちょっと待て。

「一日の始まりって聞こえたんですが気のせいですか？」

「気のせいじゃない。お前は丸一日寝てたんだぞ。今は朝の九時過ぎだ」

そういえば昨日は殆ど眠らずに川神院に来たんだった。逃げるのに必死で忘れていたけど、疲れと眠気で気絶した後そのまま夢の中に直行してしまったということか。

と、俺が納得して布団の上で腕を組んでいると

「それはそうと悟、まあ、なんだ、その・・・」

「どうしたんですか？」

急に視線を逸らして歯切れ悪く何かを言おうとする百代さん。昨日の傍若無人な態度からは想像も出来ない姿だ。

百代さんはしばらくすると、その場に正座をして

「昨日はすまなかった」

俺に深々と頭を下げた。

予想外の行動に少しの間思考が停止する。最近俺思考停止してばかりだな・・・

しかし急に土下座されて平然と出来る程俺の神経は図太くなく、すぐに頭を上げるように言おうと手を伸ばし　すぐにやめる。これも彼女のケジメの付け方。すぐに頭を上げてと言われて上げる訳がない。

「ええ、帰るのを邪魔されて大変迷惑でした」

「うつ・・・」

「しかも強制的に勝負しなきゃいけない状況に追い込まれたときは何考えてるのかと思いました」

「うつ・・・」

「拳句の果てには殴り飛ばされて気絶させられました」

「はうつ・・・」

俺が辛辣な言葉が百代さんに突き刺さる。

そのたびに百代さんは呻き声をあげながら徐々に涙目になっていく。ちょっと可愛いなー、なんて思ったりはしてない。俺は女の子をイジメて悦に浸るような趣味は無いのだから。断じてない。

「でも　　、ちゃんと謝ってくれたから許します。頭を上げて下さい。百代さん」

そもそも彼女に全て責任があるわけじゃない。

父さんがここに無理やり連れてきたせい。百代さんが勝負を持ち込んだせい。百代さんを止められなかった川神院のせい。

周りのせいにするのは簡単で、今回は確かにその通りなのだが周囲だけに責任を求めるのは違う。

結局のところ自分のせいなのだ。

両親に心配をかけなければ無理矢理川神院に連れてこられることも無かった。逃げ出さなければ百代さんが俺に興味を持って勝負を持ち込むこともなかった。

昨日の事は全て自業自得。

両親の意思を尊重しながらも自分勝手に迷惑をかけた代償。現実から目を逸らして逃げていたのが原因で、優柔不断で心の弱かった俺が招いた結果だ。

だから俺に、川神院の人達を非常識というだけで差別し関わらないようにした、自分の事しか考えなかった俺に一方的に周りを責める権利なんてあるわけがない。

「お前って、結構意地悪なんだな」

目をゴシゴシ拭きながら百代さんがブスツとした目を向ける。多分レアな光景だ。

「ハハハ、面白いものが見れました」

「笑うなよー！どう謝ったらいいかすっごい悩んだんだからな！」

顔を赤くしながら言う百代さんを見てついもっと大きな声で笑ってしまう。

そうすると百代さんはもっとブスツとした顔で非難する目を向けてきたので流石にやめた。

彼女は誠実だ。他人に対しても、自分に対しても。

だから自分がやりたいことを貫き通し、それで自分が間違った事をしたと思えばこうして素直に頭を下げれる。

きつと自分に正直に生きてきたんだろうな。子供だから当たり前のような気もするけど、この人はずっと真っ直ぐに生きていく、そんな気がする。

ああ、なるほど。

俺が川神院に対しての忌避感が薄まった理由が分かった。

百代さんと相対したとき、五分にも満たない短い時間だったけど俺は彼女の誠実さに気づいたのだろう。

先ほども思ったが、俺は他人を思っているフリをした我儘なヘタレだ。だからこそ、その誠実さに憧れた。

これが彼女のカリスマってやつなのかな？それともこれが本で読んだ殴り合って深まる友情というやつか？まあ俺一撃も当ててないけど。

それよりも

「百代さん」

「何だ？」

「俺の方も、昨日はあなたに酷いことを言いました。ごめんなさい」

今度は俺の番。百代さんが俺にしたように、布団の上に正座をして頭を下げる。

「いや、そもそもの原因は私だ。お前が頭を下げる事じゃない」

「それでもです。流石に『視界から消えて下さい』は言いすぎました」

「まあ確かにアレは少し傷ついたけどな……。うん分かった、私もお前を許す。これで良いか？」

「ありがとうございます」

ゆっくりと布団から手を離して百代さんと向かい合う。

笑顔になっていた百代さんを見て、つい俺の方まで笑顔になる。

これで後腐れは無くなった。

俺と彼女の関係はお互いの名前を知っているただの知り合いになった訳だ。

でも

「あともう一つ」

「なんだ、謝罪はもういいぞ」

なんだかそれだけじゃ勿体ないな。折角初めて会話した同年代の人なんだ。

「良かったら俺と友達になってください」

右手を出しながら言う。

百代さんはしばらく俺の手を見つめてキョトンとした顔したけど

「勿論だ。私からも頼む」

そう言って快く手を握ってくれた。

幼少期編 第五話（後書き）

あれ？いつの間にか主人公の性格がSっぽくなっていた！？
あれ？いつの間にか百代さんが物凄いヒロインっぽい位置に！？

何が起こったのか分からねえ・・・いつの間にかこうなっていたんだ・・・

というわけでお送りした第五話でした。キリが良かったので今回はここまでです。

自分で書いていて余りの可愛さに危うく百代派になりそうだった作者の一番好きなキャラはマルさんです。

まじこいSのキャラ紹介ページのラフ画（？）、それも寝ぼけたマルさんの破壊力は凄かった・・・

今さらだけどマルさんヒロイン入りおめでとう！

ちょっと考え方を変えたの急すぎたかな？でも自分の中にあるものをすぐに変えることが出来るのも子供の長所だと思います。

け、決してさっさと話を進めたいっていう理由じゃありません（

；；

後2・3話すれば幼少期編はお終い。小学校編に突入です！
もつと他の原作キャラとも絡ませたいです。

幼少期編 第六話（前書き）

お待たせしました。少し期間が空いてしまいましたが更新できました。

実は就職の試験日が十日をきってしまったため流石にヤバイと現在追い込みをかけている最中だったりします。

そのため十日ほど更新が止まります。楽しみにしている方、ごめんなさい。

しかし！その試験さえ受ければしばらくはバイトをしながら遊べる半ニート生活が待っているので更新速度が戻ると思います。

幼少期編 第六話

百代さんと友達になってから早一月。

この街（世界かもしれない）の最大の非常識である川神院をある程度克服した俺にもう行けない場所は無くなった！

フハハ！路地裏から商店街まで全て踏破してやるぞ！

・・・少し気分が高ぶった。

最近気づいたのだが、俺はどうやら外に出て遊ぶことが結構好きらしい。

最近は週の半分どころかほぼ毎日出かけるようになった。

行くところはたいてい河原にある広場。それ以外は街を一人で歩いたり、百代さんに引きずられながら色々回ったりしている。

そのおかげで友達もたくさん出来た。

河原で遊んでいる子達の仲間に入れてもらったり、本屋で本眺めているちよつと年上の人と友達になったり。

でも一番は百代さん経由で紹介してもらった子達が多いかな？

百代さんが友達が多いことに最初は少し驚いたけど考えてみれば当たり前前の事だとすぐに納得した。

運動能力が抜群で容姿も美少女と言っていていいほど良く、裏表のない活発で明るい性格。

人気者の要素盛りだくさんだ。周りに人が集まらない訳ない。

そんな大人気な百代さんなのだが、前の一件以来俺の事を気に入ってしまったらしく、俺の部屋に漫画が大量にあると知った百代さんは稽古が無い日は俺の部屋に入り浸っている。（漫画よりも小説の方が遥かに多いのだが百代さんはそれに目もくれない）

百代さんが通う小学校の図書館より数が充実している上に走って5分程度の距離（4 kmはあるのだが）である俺の家は遊びに来るのに丁度良いのだとか。

「悟ー、コレの次の巻が見当たらないぞー」

「それは前に図書館から借りてきたものだからそっちのカバンに入ってます」

部屋の主である俺を差し置いてベッドを占領している百代さん。

それを椅子に腰かけながら、本から目を外さないでベッドの横にあるカバンを指す俺。

見当たらないと言いながら百代さんは全く探したような気配が無かったのは気のせいではないだろう。

「この青いカバンか あったあった」

出会った初日で人外認定をした百代さんも今は子供らしさ全開で目を輝かせながらページを捲る年頃の女の子。読んでいるのは少年誌のバトル漫画ばかりなのは百代さんらしいが。

しかしバトル漫画のとても技を再現するのはやめてほしい。
前に某明治剣客浪漫譚の悪一文字を背負う登場人物の必殺技をやっ

ていたときは腰を抜かしたものだ。

百代さん曰く「意外と簡単」らしい。さらに言えば普通に殴った方が威力が高いらしい。もうやだこの人。

「そうそう、明日は夕方から暇なんだが空いているか？」

「大丈夫ですよ。小学校入るまでは基本暇だし」

「じゃあ明日3時に河原の広場に集合だ！」

「了解です、他の子達にも声かけておきますか？」

「別にいい、遊んでいれば勝手に集まってくるだろ」

勝手に集まってくる。一か月前まで友達が一人もいなかった俺からしたら羨ましい発言だ。

まあ本当に集まってくるから凄い。昨日なんて二人で遊んでいたのにいつの間にか11vs11のサッカーになってたときは驚いた

「でも対戦型のスポーツは嫌ですね。昨日のサッカーみたいに百代さんが入ったチームが勝利確定なんてのは勘弁です」

百代さんが一人で毎回20点以上も取るから試合にならないのだ。同年代なのに大人げないと感じるのはなぜだろうか……。

「分かってるよ。ちゃんとハンデはつける」

いや、ハンデがどうのこうのという問題では無いのだが。

残念ながら百代さんに対戦型スポーツをやらないという選択肢はどうやら無いらしい。

「いや、両足使わないなんてサッカーに喧嘩売るハンデつけときながら7得点決めた人には意味のないことです」

だってハンデつけても意味無いんだもんこの人。

「じゃあ今度は一步も動かないっていうのはどうだ？」

「それでもハットトリック決める予感しかしませんよ。というかやって楽しいですかソレ？まあ対戦型のスポーツをやりたくないのには他にも理由があるんですが・・・」

「ん？チームプレイ嫌いなのか？駄目だぞ、協調性の無いヤツは仲間外れにされるからな」

はあ、と溜息を吐く俺にありがたい言葉をかけてくれるのは嬉しいが

「唯我独尊を地で行く百代さんが言っても説得力ありません
って褒めてないから照れないで下さい」

ベッドの上で「それほどでも」と言いたげに頭を掻く百代さん。
更に言えばこの人は唯我独尊を地で行っても仲間外れにされないの
で説得力なんてものは欠片もない。

「で？なんでやりたくないんだ？」

改めて、と百代さんは俺に視線を戻す。

別にチーム戦が嫌なのではない。むしろ味方と連携してシュートを決めるのには友達が居なかった俺からすれば憧れるものだ。が、しかし

「百代さんと俺が同じチームになったことがありますか？」

「ないな あゝ、なるほど」

この言葉で百代さんは納得したようだ。

「毎回百代さんと敵チームに入れられてそのたびに大差で負ければ嫌にもなりますよ。何故か毎回一人で百代さんの相手させられるし・・・。」

百代さんがボールを持っていなくてもマンツーマンで張り付き、ボールを取ったら真っ先に突撃させられ、百代さんの近くににいるせいでボールなんて回ってこない。

チーム戦なのに殆どチームプレイ出来ないのは何故か。
嫌な役ばかり押し付けられてる気しかないので、嫌われてないよな俺・・・？なんてたまーに本気で心配している。

「そりゃバランス考えたら普通そうなるだろ」

「確かに俺は運動神経そこそこいいみたいですけど・・・」

これも最近分かったことなのだが、俺は人外の父の血を引いているお陰か運動神経は結構良かった。
具体的に言つと木から木に飛び移るくらいなら朝飯前、くらいのレ

ベルなのだが

「はぁ……」

なんで溜息を吐くのか百代さん？

俺そんな呆れられるようなこと言った覚えはないのですけど。

「そこそこじゃないんだけどなぁ……」

「そりゃ百代さんと比べたら俺の運動神経なんて射的の得意な丸メガネの少年レベルでしょうよ」

そもそも百代さんと比べるなら世界の一流アスリートを引き合いにださなきゃいけない。

「そうじゃないんだけどなぁ……」

何か諦めたような顔でこちらを見る百代さん。

何だこの暗い百代さん。結構可愛いぞチクショウ。

「なぁ悟、やつぱり川神院に入ってみないか？お前なら師範代にもきつとなれるぞ」

「またその話ですか。いくら人外の血を引いているとしてもトラック片手で止められる化け物になれる訳ないじゃないですか」

「いや、別に師範代はトラック止めなきゃなれない訳じゃないからな？」

それくらい分かりますよ。

そうそう、俺が非常識に触れるきっかけになった元凶の元凶であるトラック事件。

なんとアレの犯人（？）は川神院の師範代だった。名前は釈迦堂さん。そっぴい母さんが釈迦堂さんがどうたら言っていたのが記憶の片隅にあったな。

まあ出会った瞬間に回れ右をしてダッシュで逃げてしまったのだが・・・。

百代さんと友達になったことで大分慣れたと思ったけど、すべての元凶である釈迦堂さんにはそうでもなかったらしい。釈迦堂さんが半径10m以内に入ると体が拒否反応を起こし逃走を開始してしまうのだ。

離れて話してみた感じでは面白いおじさんだったので出来れば早く慣れたい。今の目標は9mで話すことだ。

「今はもう少し外を見て回りたいんです。体を動かすのは好きだから落ち着いたら入るかもしれません」

「それ、本当だな。他の道場に行くとかナシだぞ？」

川神市は武術の総本山と言われる川神院があるせいか道場やジムの数が他の地域よりかなり多い。

種類は空手は勿論力ボエラなんてややマイナーなものまである。まさに武の聖地。

そのため教え子の数が足りない、というのは良くある話のようでこの道場でも年中入門者は絶賛募集中らしい。

「分かっていますよ。折角の縁ですからその時は川神院に行かせて

貰います」

「本当だな？約束だぞ！」

ガバツと身を乗り出しながら嬉しそうに言う百代さん。

本当に百代さんはいつでも楽しそうだ。お蔭でこっちまで楽しくなってくる。

そのあと外に出かけたいと言った百代さんに連れられて河原で遊んでいたら、いつも通りどこからともなく大勢の子達がやってきた。

百代さんはさっきの宣言通り一步も動かないというハンデを付けたのだが、結局13対4でこちらの負けになるのだった。

次は目隠しでもしてもらおうか？

幼少期編 第六話（後書き）

という訳でお送りした第六話でした。

なんだか百代が可愛すぎてもうヒロインにしたいくらいです。

最近友人にまじ恋をやったことやらせることに成功。

そしてやらせて3日で全 を終わらせたことに驚かされました。

おい友人・・・、大学休んでないだろうな？

幼少期編 第七話

小学校の入学まで半年を切った今日この頃。

今日もいつもと変わらぬ休日の朝。

何故か俺が起床するよりも早くリビングで朝食にあり付いていた百代さんと一緒に家族で朝食を食べていると、そこに電話がかかってきた。

相手は俺が良く利用している市立図書館の館長さんで、新しい本が入ってきたから連絡したとのこと。

そういえば最近の外で遊ぶ機会が出来たせいか、2週間程図書館には行っていなかった。（以前なら借りてきた本は3日程度で読み終わってしまうので週に2回は通っていたのだが。）

でも今日は百代さんが既に遊びに来ているので、明日行くことを伝えようとしたら

「図書館に行くのか？私は行ったことがないから行ってみたいな」

という百代さんの発言により予定を変更して今日図書館に行くことになった。

いつも街を案内してもらっているのだ。たまには俺が百代さんを案内するのもいいだろう。

ということので現在川神市立川神中央図書館来ている訳だ。

「おお、ここが図書館か。結構広いな」

自動ドアを潜り見えてきた本で出来た世界を見て、百代さんが感嘆の声を上げる。

本の山、本の海、本の森。大自然を表す表現ならどれも当てはまってしまうほどの本の数。

蔵書数国内8位、年間利用者数国内9位という市立とは思えないクオリティーを誇る川神図書館。

普段他の図書館を利用している人にも圧倒される光景だろう。

「あまり大声を出さないで下さい。図書館では静かに、これは日本共通のマナーです。あと館内では走っても駄目ですよ」

口に人差し指を当てながら来る途中にも教えた最低限のマナーを改めて口にする。

そういえば外国と日本では図書館の概念が随分と違うらしい。

アメリカの図書館では基本うるさくしても咎められない場所が多く飲食して寝ても大丈夫な場所まである。らしい。

イスラエルだと図書館では静かどころか様々な学問での討論が飛び交っている。らしい。

何分実際に見たことないので分からないけど、とりあえず静かに本を読みたい派である俺はアメリカの図書館を利用してもその場で本を読む日は来ないだろう。

イスラエルの方は一度行ってみたいかもしれない。イスラエルに行く機会があったら、だけど

「漫画コーナーはどこだ？」

「向こうです」

漫画の棚がある方向を指さすと百代さんは返事も礼も言わずに俺の全力走より速い早歩きで向かっていった。

いや、走らなければ良いって問題じゃないんですけどね百代さん。まああの人なら他人とぶつかるような事はないと思うが。

ここの図書館ははかなり広いし本棚のせいで迷いやすいから迷子にならないか？と普通の子供なら心配するだろうが問題ない。

そこは百代さんクオリティー

あの人半径50m以内なら俺の『気』を感知し識別出来るというどつかの念能力者の達人もかくやという謎技能を持っているのだ。

今はまだ探知は出来ても数人しか識別は出来ないと聞いていた。

その中の一人に俺が含まれているのは嬉しいことなのだが、かくれんぼする際に百代さんが俺を真っ先に見つける原因になっている辺り少し複雑だ。

というか図書館を案内しようと思ったんだけどなあ・・・

「おやおや、悟君。久しぶりだね」

ふと自分の名前を呼ぶ声に振り返る。

俺を君付けで呼ぶ人は鉄心さんかルーさんの他に一人しかおらず、今の時間だと二人は川神院で指導に精を出している時間なので誰かは限られる。

「山野辺さん。お久しぶりです」

その人物の名前を呼びながら振り返る、間違えたらかなり恥ずかしいな、なんて思ったが予想通りそこにはスーツを着た40代半ば程のナイスガイ。

図書館員の証である赤い名札を付け物腰の柔らかい雰囲気になややかな笑みを浮かべた、人畜無害なオーラをまき散らしている人物は山野辺さん。この図書館の館長を務めている人で今朝俺に連絡をくれた人だ。

俺が外に脱引き籠りを成功する以前の数少ない知人で、俺の本仲間であり先輩。

もつともこの人は俺みたいん物語だけではなく学術書やら児童書まで幅広く愛読しているのだが、それでも俺が読んだ物語の数などこの人の10分の1にもなっていないだろう。

「今日は可愛い御嬢さんと一緒だね。悟君もそいつのを気にする年頃かい？」

百代さんが去って行った方を見ながらニヤニヤと笑う山野辺さん。不快に感じないのは山野辺さんの人柄を知っているからか。

「分かって聞いていますよね？彼女はただの友人です」

「おやおや残念。小さな友人に恋人が出来たと思ったのに・・・」

まあ可愛いという点は同意しますよ。

あれで人間としてオーバースペックじゃなかったら惚れてるかもし

れません。

「それよりも驚いたよ。本の虫の悟君が二週間も図書館に来ないなんて。天変地異の前触れかと思ったじゃないか」

「天変地異なら割と毎日起こつてると思いますよ。主にこの街にある武術の総本山で」

昨日も川神院を震源地にした震度3が観測されたしね。

「フフツ、悟君。天変地異でも毎日起きればそれは日常に属することだよ」

俺の頭をポンポンと叩く山野辺さん。

ありがたのお言葉だ。俺が川神院に（強制的に）連れて行かれる前に聞いていれば少しマシな結果になっていたかもしれない。

「それよりもアレは？」

「用意していますよ。悟君がここ2週間は来なかったので随分と溜まってしまいました」

『例のアレ』と言っても別に危ないお薬とかそういう類のものじゃない。

ここは図書館。つまり答えは一つ。何の捻りもないが『例のアレ』とは本の事だ。

背を向けて歩いていく山野辺さんの後を追って受付カウンターを通り、関係者以外立ち入り禁止』と書かれている扉をくぐると、そこ

は10mほどの廊下。

突き当りには職員用の出入り口があり、そのほかには無記名のプレートが貼ってある扉しかない何とも殺風景な廊下だ。

山野辺さんは鍵が30はついている鍵束を取り出すと、迷いなく一つの鍵を選び廊下唯一の扉を開け、俺をそこに招き入れる。

目に入ってくるのは、一般公開されている場所の数倍はギュウギュウに敷き詰められた本が収まっている棚の数々。

ここにあるのは表に出すのはちよっぴり過激だったり、ちよっとマニアックなジャンルだったりする本達だ。

ふと手近な『教本』のプレートが貼りつけられた本棚から一冊手に取り

『素手で熊を倒す108の方法 橘平蔵』

「・・・・・・」

タイトルを確認して音も無くそつと戻した。色々と突っ込みどころのあるタイトルだった。

以前の俺ならネタとして読んだかもしれないが、実際に素手どころか気合だけで倒せそうな人たちを知ってる今では読む気になれない。

読んだら俺まで人外の道を一步踏み出しそうな気がしてならないのだ。

その後、『私用』と書かれたロツカーから山野辺さんオススメの本をネタバレを含まない程度の解説を交えながらチヨイス。

二週間図書館に来ていなかったので、その本達の数俺の体の倍くらいはありそうな量になっていたのと（いつ俺が来てもいいように山野辺さんは毎日少しずつ自宅から本を持ってきている）

山野辺さんの紹介の仕方がとても上手くてどれを持って帰ろうかと悩みに悩んだのだが、山野辺さんの「選べないなら全部持つていけばいいじゃない」という発言に全て解決

思わず「マジっすか!？」と体育会系な返事をしてしまった。

「これはモリモツサ国の詩人が書いた民族間の闘争を題にした物語ですね。」

14世紀初頭、とある平原に住む一人の強く美しい少女を巡って二人の民族長の決闘から始まる民族の戦い。果たして少女の心はどちらに揺れ動くのか・・・」

山野辺さんの声をBGMに最初の数ページを流し読みをしていると頭に浮かぶのは百代さんの顔。

最近強い女性と聞くと必ず百代さんが頭に出てくる。

まあこの物語のヒロインが百代さんだったら「私と勝ったら結婚してやる」なんて男らしいことを言ってすぐに解決しそうだから物語にならないと思うけど。

例え物語になっても売れないな。終始女の子と決闘してボコボコにされる内容の本なんて誰が読みたがるのか。

いや、逆に読んでみたいかもしれない。

しかし毎度のことながら名前を聞いたことのない国の本を良くも集

められるものだと感じる。
その事を伝えると

「その言葉、川神書店で言っておいて下さい。親父さんきっと喜びますから」

と言われた

「川神書店には本当にお世話になってますよ。大手の書店ですら手に入れない本をどこからともなく仕入れてくるんですから。図書館長としてもお得意様をやらせてもらってます」

よかったな書店のおっちゃん。この図書館がある限りアンタの店は潰れることはないよ。

さて、一冊一冊丁寧な解説をされてしまったため大分良い時間になつてしまった。

そろそろ帰る事を伝えると、山野辺さんは慣れた手つきで本を紙袋に入れ始めた。

かなりの数があったのだが、ものの数分で全てを紙袋に入れ終えた山野辺さんに関心しながら二人で合計6つの紙袋（入りきらずに本が数冊はみ出している）を半分ずつ持ち部屋を出て、職員の邪魔にならない様に受付カウンターに置いた。

「おー、悟。良いところに来た。丁度呼んで貰おうと思ってたところなんだ」

と、そこでちゃんと声を抑えながら俺の名を呼びやってくる百代さん。

『探しに来た』ではなく『呼んで貰おう』と言つあたり予想通り気で俺の位置はちゃんと把握されていたようだ。

「なんだこの紙袋は、もしかして全部本か？すごいな、こんなに借りることが出来るのか」

「いえ、この本はこちらにいる山野辺館長が個人的に貸してくれた本です」

紙袋の中を興味津々に覗き込んでいる百代さん

本来この図書館で一度に借りられる本のは数は10冊までと決まっている。

一冊でも多くの人に本を読んでもらおうという本好きには眩しすぎる精神を持っている山野辺さんにとって、いくら俺を気に入るうともそれは破ることの出来ない鉄の掟。

しかし、ここに積みされているのは全て山野辺さんの私有する本だから問題ない。

図書館に入り浸るようになった初めの頃、一日に何度も通い詰める俺を見た山野辺さんが「子供が何往復もするのは疲れるだろう」と丁度自分が持っていた分厚い本を渡してきたのがきっかけ。

それ以来、最低一日は使わないと読み切れないような館長オススメの本をこうして貸してくれるようになったのだ。

え？図書館で読めって？

甘いぞ。

物語を読むときは書き手に最大の敬意をもって最高の環境で読むのが俺のポリシー。

故に図書館を井戸端会議の場所と勘違いし、やかましい子供を放置

してる奥様方達の傍で読むなんてナンセンス！
やはり本は自室かりビングのソファで読むに限るのだ。

「どうも初めまして御嬢さん。この図書館の館長を務めている山野辺です」

「初めまして。私の名前は川神百代だ・・・です」

朗らかに微笑む山野辺さんにペコリと頭を下げる百代さん。
うむ、良きかな良きかな。

「しかし悟、これだけの量一人で持てるのか？手伝うおうか？」

紙袋の一つを軽々と持ちながら聞いてくる百代さん。

「大丈夫ですよ。女の子に重いものは持たせられません」

「でも私はお前より力があるぞ？」

「力は関係ありません。ただの男の意地ですからここは立てておい
てください。百代さんも自分より力が強いからって3歳児に荷物は
持たせないでしょう？」

なるほど。と納得した百代さんから紙袋を受け取り、横2×縦3に
なるように他の紙袋を積み上げ

「ふんっ！」

と気合を入れて一気に持ち上げる。

流石にかなり重いが家で読む時の事を考えれば全然苦にならない。

「それでは今日はありがとうございました。これで失礼します」

「またいつでも来てください。悟君と本について話すことは私にとつては楽しみの一つですから」

嬉しいことを言ってくれる山野辺さんに見送られながら図書館を後にする。

外は既に日も大分落ちてきてカラス鳴き声や豆腐屋のラッパでも聞こえてきそうな雰囲気だ。

商店街の方からは商売に勤しむおっちゃん達の元気の良い声が響き、俺たちの他にも帰宅途中の学生が絶えることなく行き交っていく。

「あれ？百代さんは一冊も借りなかったんですか？」

今さらながら百代さんが手ぶらな事に気づく。

「ああ、なんか家で読んで汚したら悪いからな。漫画ならお前から借りればいいし」

「それは俺の漫画なら汚しても構わないということですか？」

「悟の漫画なら気楽に読めるってことだよ」

あまり意味が変わっていないよ百代さん。

仲が良いから、的な意味で言ってるのは分かるけどね。

「あ、師範代」

百代さんがふと声をあげる。

視線の先をたどるとそこには黒系統のシャツにジーンズを履きたいつものスタイルの川神院の不良師範代。釈迦堂さんがいた。パチンコの帰りだろうか、その手には中々大きい紙袋を抱えている。嬉しそうな表情からするに結構勝ったようだ。

「何だ、百代に坊主。今帰りか　　って相変わらずだな坊主」

声をかけると同時に電柱の後ろに姿を隠した俺を呆れたような顔で見る釈迦堂さん。

「相変わらずと言われてもすぐには治りそうにないんで諦めて下さい」

こればかりは俺の意思が関係ない完全な条件反射なのだ。
おいおい直していくしかない。

「まあ別に良いけどよ、なんだ？その大量の紙袋？中身は全部本か？」

ススス　　サササ

中身が気になったのか紙袋を覗こうと近づいてくる釈迦堂さん、とそれに平行にスライドして距離を離す俺。

「ハア　　そっぴゃお前、小学校行ったら川神院に来るらしいじ

やねえか？道場の見学とか来なくて良いのか？」

数m歩いても距離が縮まらない事に釈迦堂さんは小さく溜息を吐く。こんな対応をとっても怒らないところを見ると、見た目や風評ほど根が悪くないのは確かだ。

「いえ、遊びに行ったときに見学していますし」

初めて川神院に行き百代さん達と出会い半年、百代さんに招かれたり父さんに連行されたり自発的に行ったり。行く理由は様々だが20回は行っただろうか？

「まあ楽しみにしておくわ。お前なら素養も十分だろうしな」

以前も百代さんに言われた事だが、今回は師範代からのお墨付きだ。普通は喜ぶところだろうが、良くある勧誘文句だと思ってしまっただけ。自分は随分と捻くれた子供だと思う。

「平均よりやや運動神経が良くくらいじゃ川神院でやっていくには少し不安ですね。俺はちよっと普通じゃない人の血を引いてるけど、俺もまた一般人ですから」

「.....」

ん？百代さんの方から無言のプレッシャーを感じるのは何故だろうか？

「って、時間がヤバイ！百代さん、釈迦堂さん。失礼します」

午後6時を告げる鐘の音が川神院の方から響いてくる。

これ以上帰りが遅くなると母さんにまたいらない心配をかけてしま
う。

「・・・おう、気を付けて帰れよ」

「・・・またな」

不思議とややテンションが落ちている二人を尻目に家の方へと足を
進める。

さて、どの本から読もうか？

今夜は夜更かししないように気をつけよう。

s i d e o u t

「ちよつと普通じゃない人の血を引いてるだけの一般人 ね」

先ほどの悟の言葉を反復しながら釈迦堂は思わずといった感じに眉
をひそめる。

それは隣に居る百代も同じだ。百代にはそれに諦めたような表情と
いうものが追加されているのだが。

「なあ、百代、アイツ本当に自分で気づいていないのか？」

「気づいてないでしょう。絶対に」

「「・・・・」」

「「・・・・はあ」」

しばらくの無言の後、二人は同時に溜息を吐く。これが師弟関係のなせる技なのか。

その視線の先には、「自分の倍の体積はあろう本の山」をスキップしながら軽々と運ぶ悟の姿があるだけだった。

「悟ー、お前自分で思ってるほど普通じゃないんだぞー」

そんな百代の独白も遠ざかっていく悟の耳には入ることはなく、街の騒音に消えていくのだった。

その日の晩。川神市限定ローカルラジオ番組にて

『やあ皆！今日も毎晩恒例5分間のハイスピードラジオ、川神ソウルのお時間だ。』

『時間が無いから早速一通目のお便りを紹介するよ！川神ネーム少年A君（7）から』

いつも遊ぶ女の子がいるのですが、運動神経が良すぎてサッカーをしても勝負になりません。何か良いハントはないでしょうか？』

『そうだね、勝てないなら足を使わせないなんてどうかな？』

ハハッ！なんてね。それじゃあサッカーにならないか！しかしA君。君はそれでも男の子かい！女の子にハントをつけてもらうなんて情けないぞ！その子に勝てるように練習するのが一番だ！頑張れ！』

『さあ二通目のお便りはモモちゃん（7）からだ。最近男の友達が出来たのだが、そいつは自分の才能に気づいていない。どうすればそれを自覚させられるだろうか？』

『才能かー。何の才能かは分からないけれど、そうだね。まずは話して教えるのが良いかな？もしもその子がどうしても自覚しないならその才能を発揮せざる得ない状況に追い込んでみるのはどうだろうか？』

『さて時間も無くなってきたからこれが最後のお便り。おお！これは久々の目撃情報だ！川神市七不思議の一つ 本小僧 が今日の夕方2週間ぶりに目撃されたようだ』

『え？本小僧は何かって？おいおい、それでも川神市民かい？』

本小僧は自分の何倍の体積もある本の山を恍惚とした表情でスキップしながら軽々と運ぶという、一説では地方妖怪マグロの親戚との噂もある妖怪だ』

『見た目は小学校低学年位の子供だけでも、話しかけたら持っている本で生き埋めにされるらしいから見かけても話しかけてはいけないよ?。お兄さんとの約束だぞ!』

『さて、今日の楽しい時間も残念ながらこれまでだ。今日は異性の友人に関するお便りが多かったね。そうやって性別を気にせず遊べるのも幼いころの特権だ。皆仲良くしろよ!』

それじゃあまた明日会おう!グンナイ!』

幼少期編 第七話（後書き）

「ジャスト一か月と18日だ、言い訳は済んだかよ？」

はい、言い訳なんざございません。

単純に遊びほうけて一か月以上更新放置しましたアホ作者の息抜きでございます。

いつも読んでくれている方々、ごめんなさい。

しかもしばらく書いていなかったせいで文章の書き方を忘れてしまった始末orz

マジ酷え文・・・こいつぁ駄目だ、と色々な作品を読んで練習している最中だったりします。

さて、今回お送りした第7話

キャップ での川神書店閉店危機イベントのフラグを既に折っている事の確認回でもあります。

次回で小学校編に突入兼川神院入り、です。

前にも書きましたが小学校編で原作キャラの多くと邂逅します。

この前とあるIS二次創作の感想で結構はっちゃけた感想を書いて後から恥ずかしくなった息抜きですでも後悔はしていない。

ISのSSも書いてみたいなーなんて思うけど息抜きはバリバリの文系のため理系用語は苦手なのです。けっして用語を調べるのが面

倒だとかそんなんじゃないやありません
それよりもまずこの作品を完結させることが優先ですがねw

小学生編 第一話（前書き）

総合評価1000pt突破!?

しかも日間ランキング34位!?

急に評価が上がりすぎてて本気でビックリしました。

たくさんの人に楽しんでもらえたみたいで嬉しいです^^

これからもよろしく願いします

小学生編 第一話

side 悟

二十歳を超えると三十路なんてあつという間、なんて事は良く聞く話で、子供と大人では体感時間が違い、子供の1年は大人の1月なんて事を本で読んだことがある。

単純に考えると、6歳児の1年間というのはその人生の6/1になるが、60歳の老人にとつて1年間はその人生の60/1になるのだから、当たり前と言ったら当たり前なのかもしれない。

勿論大人は多忙ゆえに時間が進むのが早く感じるということもあるのだろうが、この際考えないことにする。それに、子供も遊びや勉強で中々忙しいものだ。

何が言いたいのかというと、俺は6歳児にも関わらず、恐らく俺の人生を左右したであろう去年の誕生日から今日までの時間。およそ一年間がまるで一月の事のように感じた、というだけの話だ。

原因は言わなくとも分かる人は多いだろう。

もしかしなくても百代さんだ。

以前図書館に百代さんに行ったのが半年ほど前（あれから百代さんは一度も図書館に足を運んでいない。「飽きた」だそうだ）。

何がきっかけになったかは知らないが、その日以降百代さんは元々多かった俺を外に連れ出す回数が更に増えた。

それはもう毎日と言ってもいい程で、百代さんはちゃんと鍛錬をこなしているのだろうか？と疑問に思ったほどだ。

連れ出す場所が河原や公園から近辺の山や海が増え、山では忍者のように木から木に飛び移ったりする百代さんを追走し、海では海面を走る百代さんに「海に来た意味あんのかよ！」と突っ込みたくなるのを堪えながら泳いだ。

更には、なぜか川神院の合宿に「コース体験だ」と言われ雪の降り積もる長野の山にも連れて行かれ、他の門下生と共に雪で足場の悪くなった山道を山頂目がけて練り歩いたりもしたのだが、そのお蔭で元々そこそこ良かった身体能力にさらに磨きがかかり、50m走を6秒台、クロールで25mを19秒という7歳児とは思えないスベックを手に入れてしまった。

最近人外に少しずつ近づいている気がするのは多分恐らくきつと気のせいだと信じたい。

そして俺の身体能力が向上する度に百代さんが「計画通り（ニヤリ）」みたいな顔を陰でしているのも目の錯覚だろう。

そんな感じで自然に百代さん好みに肉体改造をされている気がしなくもない日々を送っている内に、もういくつ寝るとお正月、なんてことを考えていたのがまるでつい昨日の事のように感じる程、いつ

の間にか時間が過ぎ去っていた。

まあ楽しく充実した日々を送れたと満足はしている。歳を取っていてもいなくても楽しい時間は早く過ぎるものだ。

閑話休題

突然で悪いのだが、半年の時間を経た俺は只今とある行事の真っ最中であつたりする。

改めて今の状況を報告をしたいのだが、最近はたった二文字で現在の行動を端的に表すことの出来る言葉が流行ってるらしいのでそれを使ってみよう。

入学式なう

「 私たちは本校の生徒であることを誇り

」

4月4日

市立とは思えないほどの広大な体育館は最近新設されたく、新

入生及び関係者全員を収納してもかなりのスペース余らせている。近年指定された学区外の学校でも希望すればその学校に通う事が出来るようになり、つい昨年設備の新設と増築がなされたばかりのこの学校はかなりの人気を博したようで今年の新入生はなんと324名。実にクラス8個分だ。

それに比例して入学式に参列したたくさん保護者の数を合わせるとその数は千を超え、少しだけ肌寒い今日には丁度いい熱気が充満していた。

並べられたパイプ椅子の一つに腰かけながら、俺はふと檀上で新入生代表の挨拶をしている利発そうな少年に目を向ける。

『 私たちは、この学校で過ごせる6年間。多くの事を学び、多くの友人と出会うことのできる6年間に、期待で胸を大きく膨らませていきます 』

男子小学生特有のソプラノボイス。俺の知っている子供はまだ舌足らずな子が多いのだが、檀上の少年は張りのある声で大人顔負けの綺麗な発音で挨拶を行っていた。

聞くに新入生が檀上で挨拶するのは今年が初めてらしい。

それほどあの男の子が優秀なのか、それとも新設した記念に今年から、と学校の意向なのかは分からないが中学校や高校ならまだしも小学校で新入生が挨拶するのは珍しいことだろう。

さて、何故入学式中に先ほどまでここ半年間の回想をしていたかと言うと 　　ただの現実逃避だったりする。

人生初めての大きな行事。本来なら緊張やらでこんな事を考えている余裕なんてないのだが、こんな事を考えざる得ない状況を作っているところある人が原因。

やっぱり百代さんだ。

「（ギラギラ）」

俺が座っている席の約20m後方にある保護者席。

父さんと母さんに挟まれるようにして座っている百代さんがまるで親の敵を見るかのような視線を俺に向けているのだ。

その視線たるや絶対零度と呼ぶに相応しく、周囲の程よい熱気も俺の周囲だけ遮断されているようで春にも関わらず冬に逆戻りしたと錯覚しそうなほどだ。確か川神流の奥義の一つに気を冷気に変換する技があるのだが、まだそれは百代さんは使えない筈。

一般人は漠然と気を感じる事しか出来ず、同じく一般人であるはずの俺がかなりのプレッシャーを感じるほどの、所謂強烈な「気当て」というヤツなのだが

「ヒソヒソ（ねえ、あの黒髪の子凄く可愛いよね？）」

「ヒソヒ（パパたちと同じところに座ってるから誰かのお姉さんかな？）」

「ヒソ、ヒソヒソ（知らないのか？二年生の川神百代。この辺りじや有名な子だよ）」

俺の周囲は何事もないかのように平常運転だ。

恐らく気に指向性を持たせてピンポイントで俺に当てているのだろう。体外に放出した気の治療は上位の門下生しか出来ないと聞いたのだが、まあ百代さんなら、と納得してしまう。現に隣に座っている新入生三人は百代さんに何度か視線をやっているが、一般人が敵意のある強烈な気当てを受けたときに感じる眩暈や嘔吐感といった症状は特に見られない。

「ハアツ・・・」

息苦しさに入學式が始まってから合計30回目の溜息を大きく吐き出す。

身体機能に害を及ぼすような敵意のある強烈な気当てを式が始まる前から受け続けてかれこれ30分。好きな本の内容やさつきみたいにここ最近の出来事を思い返すなどして気を紛らわしてはいるが、正直すこぶる居心地が悪い。

普段から川神院にお邪魔させてもらい、気当てに対して耐性が出来ていなかったら保健室直行間違いなしだっただろう。

更に面倒なのもう一つ。俺が体を動かしたら他の子に気が当たってしまう可能性があるので下手に動く事が出来ず、楽な体勢に変えることも出来ない事だ。

もちろん百代さんにはそんな事をしているつもりはないだろうが、状況的に「他の子に当てて欲しくなかったら大人しく当たってる」と脅迫されている気がしなくもない。

何で初対面が9割9分を超えるこの場で人質取られるような状況にならなきゃならんのか。

「ヒソヒソ（あー知ってる！よく河原で遊んでる子だろ！）」

「ヒソヒソ（ああ、川の上走ってるの見たことある！）」

「ヒソヒソ（それぞれ）」

何も百代さんが俺に対して厳しい視線を送ることが無かったわけではない。一年間も友達をやっていたれば喧嘩なんて当たり前のようにする。

むしろ喧嘩っ早い百代さんと一緒にいて喧嘩しない方がおかしいと言うべきか、百代さんのアイスを間違えて食べてしまったり、徹夜で本を読んでいたせいで寝坊してしまい遊ぶ約束をすっぱかしてしまっただけは大抵あんな感じだ。

しかし今回のように少年漫画よろしく、怒りの波動で川神流奥義の領域に一步踏み出してるっぽい程怒ることはさすがに今まで無かったのだが、これには多摩川程深く、鳥取砂丘ほど高いなんとも中途半端な理由があるのだ。

事の発端。こうなった原因の、とある事実が発覚したのはつい今朝方。

目覚ましを鳴る前に黙らせてリビングに降り、ここ半年で恒例となった家族＋百代さんと朝食を摂ったのが事実発覚1時間前。

ウキウキ気分で黒の半ズボンにとブレザーで正装した俺を見た百代さんから、「馬子にも衣装だな」と最近漫画で覚えたであろうありがたーいお言葉を受けて家を出たのが事実発覚30分前。

綺麗に咲いた桜並木を歩きながら「小学校に入ったら何をして遊ぶか？」なんてことを楽しそうに百代さんと話していたのが事実発覚10分前。

そして百代さんが校門と表札を見て驚愕の表情を浮かべたのが事実発覚20秒前だった。

「ヒソヒソ（ん？でもおかしくないか？）」

「ヒソヒソ（うん、僕も思った）」

そう、こうなった原因は単純明快至極簡単。

『
以上を持ちまして挨拶を終了させていただきます。本日
はまことにありがとございました。』

新入生代表、葵 冬馬

「ヒソヒソ（確かあの子、隣の学校じゃなかったっけ？）」

「ヒソヒソ（だよな？）」

「ヒソヒソ（何で他の学校の子がこの入学式を見に来てるんだろっ
な？）」

俺が今日から通う小学校の名は百代さんの通う川神市立川神小学校

から南に5km程離れた場所に位置する、川神市立『南』川神小学校だ。

つまり、百代さんとは違う学校なのだ。テヘペロ

「（ギンッ！）」

oh、百代さんからの視線がさらに強くなった上に服の袖が凍りついた。これは間違いなく気を冷気に変換し凍てつく波動で相手を氷漬けにする川神流奥義が一つ。雪達磨！
やったねモモちゃん、奥義が増えたよ。

俺も百代さんも同じ学校に行くもんだと思っていたからこれには驚いた。

事実が発覚する20秒前。川神市立南川神小学校の校舎を見て石像のように固まっていた百代さんは10秒ほどの時間をかけて石化魔法のレジストに成功。その後発した最初の言葉が

「ここ・・・どこだ？」

だった。

百代さん、俺と会話していたせいで自分が普段通学する道とは全く違う道を歩いている事に気づかなかったらしい。

仲の良い友人と入学式に向かう途中、まだ見ぬ学生生活に夢と希望を膨らませ語り合っておきながら違う学校でした、だ。

百代さんじゃなくても怒るだろ普通。

まあ百代さんの場合はその怒りの矛先を全てこちらに向けていなければ良かったのだが・・・

なんて考えているうちに袖口の氷が徐々に俺本体へと向かってきている。そろそろ対策を考えないと氷漬けにされそうだ。

幸いなことにまだ見つかっていないが、こんな人が大勢いる中でそんなところを見られたら次の日からは雪達磨か雪男と呼ばれること間違いなし。

小学校入学式なのに学校生活より百代さんの方を気にかけなければならんとは・・・

どうやって百代さんの機嫌を直そうか・・・

小学生編 第一話（後書き）

どうも、書くスピードが戻るどころか倍遅くなっている息抜きです。
マジで文章書けねえorz

さて、と言うわけで今回から小学校編突入！いやー長かった、話数じゃそんなに長くないけどここまで来るのにリアルタイムで三か月！まじこいSが出るまでに高校編に突入することが出来るのか不安であります

今回の話で分かる通り、残念ながら百代さんとは別の学校です。

冬馬とか準や英雄はもろ私立に通ってそうなのですが、作中で明言されていないことを良いことに作った独自設定。

まあ一般生徒めっちゃいる川神学園に通ってるし問題ないよね？

実は南川神小学校が去年改装が入った原因は九鬼グループだったり
と裏バレしてみたり。

次回からはようやくオリ主in川神院！

最強オリ主ストーリーが 始まりません。

作者が脈絡のない最強設定があまり好きではないのでちゃんと主人公には血の滲む努力をしてもらいます。（まあ身体スペックは十分チートと呼べるものだったりするのですがね）

完全無敵全方向隙無弱点無最強ストーリーも好きですが、一番好きなのは一見強そうに見えるけど大きな弱点抱えてるっていう設定。
（Aには勝てるけど相性の悪いせいでAより弱いBには勝てないみ

たいな)

時間制限とかも大好物。

残り稼働可能時間3分！

0.1秒の駆け引きの末時間切れと同時に敵を倒す！

濡れる！！！！

いつかそんな作品を書いてみたいです。

小学生編 第二話

『冷凍ビーム殺人未遂事件in体育館』と俺自身にひっそりと記憶されることになった珍事から3時間後。

雪だるまになる前に体調不良を訴えて保健室へと避難し、不名誉なあだ名を付けられることも変人扱いされることも何とか回避することが出来た。

何故か入学式中に腕が凍傷になるという事態に対し、摩訶不思議と頭を捻りながらも的確な処置をしてくれた保険医に感謝し、入学式が終わったタイミングを見計らって保健室を出た俺は、皆が教室に入る前には間に合ったのでそれほど目立つこと無くクラスメイトとの合流に成功。

運悪く入学前に面識のあった子達は同じクラスに一人もいなかったのは寂しかったが、仕方ない。何せ河原と一緒に遊んでいた子達は年齢も性別もバラバラだったのだから。

全員の自己紹介が終わってしまえばすぐに解散だったので、クラスメイトの顔と名前もまだまだ一致していないが、どうせ毎日顔を突き合わせることになるのだ、少しずつ覚えていくとしよう。

ああ、そういえば入学式で新入生代表の挨拶をしていた・・・確か葵君だったか・・・、彼だけは印象に残っていたので覚えている。

学校の事はこれくらいでいいだろう。他には特筆するような事は無かった。

さて、大切なのは今、なんてキザッたらしい台詞を言うつもりは無いが、今俺が結構大事な局面にいることは間違いない。

ハプニングこそあったものの無事に入学式を終えることが出来た俺は、校門を出ると同時に百代さんに拉致され川神院まで連れてこられ、現在百代さんに迫られていたりする。

「これが同意書だ。本日の日付、生年月日、本名を書いてここに判を押せばその瞬間から晴れて川神院の門下生だ。さあ書け早く書け今すぐ書け！」

まあ、迫られていると言っても、ラブロマンス的な要素は一切ないのはお約束と言ったところだ。

興奮で多少鼻息を荒くした百代さんが俺の鼻先5cmに一枚の紙をズイと突きつけるのは、上部には目立つ様に一番大きく「同意書」と直筆で達筆な文字で書かれている紙。

言わずもがな

これは川神院に入門するための同意書だ。

「さあ！さあ！さあ！」

声に連動してズイズイズイと1cmごとに紙が突き出され、気づけば紙の揺れで風を感じる程の距離まで迫っていた。

同意書片手にはやく記入しろ！と迫ってくる人物。

文字にしたら警察に通報すること間違いなし、怪しい人物の出来上

がりだ。

もし今の百代さんのように売り込むセールスマンがいたとしたら誰も契約しないだろうし、するやつが居るとしたらそいつは間違はなく詐欺師の類だろう。

「取りあえず落ち着け百代さん、つか紙が近すぎて内容が読めんわ！」

なんてことを考えながらも、取りあえず落ち着かせるために敬語なんて使わず頭をペシリとはたく。

「あうつ・・・」

俺程度の攻撃が避けれないほど興奮していたのか、百代さんは可愛らしい悲鳴を上げて沈黙。

無意識の内に少し力を入れすぎてしまったようで、少し涙目になりながら頭を抑える百代さん。その拍子に百代さんの手から離れた紙を拾い、文面を見る。

鉄心さんや百代さんを疑っているわけではないが、こういう書類はちゃんと読むのが基本だ。いくら親しい人相手でも不審な文が無いかどうかしっかりと確かめよう。

まあ、書いてあることが『川神院に己の意思で入ることに同意する』しかないのだから不審になりようがないが・・・

「そもそも、こういう書類は俺が書いていいんですか？普通親が書くものじゃ」

紙についたしわを伸ばすように指でパシリと弾く。

川神院に入るための書類は昨日の段階で父さんが全て書き上げてい

て、俺自信が記入しなければいけない項目が無いことも確認済みだ。

「『いかに保護者が強く望もうと、本人に入門の意思が無ければそれを認めず』」

部屋に百代さんの声が響く。何を？と聞き返そうとしたが、いつもとは違い真剣な声色に言うタイミングを逃してしまう。

同意書から顔を上げると、涙目で頭を押さえていた百代さんの姿は無く、そこには声色同様真剣な表情の百代さんが鎮座していた。

「『これは川神院の門下生に課せられる一番最初の覚悟。己が決めた道に生き、己が決めた道に行く。川神院は武術のみを得る場所に非ず』」

『川神流は武術であり武道なり』

そう締めくくった百代さんが、少しの間を置いて再び口を開く。

武道とはその文字が示す通り、道だ。

その道を踏み出す第一歩を、背中を誰かに押してもらって踏み出すのも間違いではない。

むしろ他人の勢いを借りる分、自分で踏み出すよりも大きく踏み出せるかもしれない。しかし、自分の足で進めた第一歩と比べると覚悟が少ない。

武道の道は一步目の勢いを保ったまま進めるほど短い距離ではないのだ。

時に休み、時に引き返し、時には諦めてしまおうだろう。

その時に必要になってくるのは己を奮い立たせる強い意志、強い覚悟。その覚悟を得るための最初の試練がコレ。

俺はまだ道に立ってすらいない。第一步を踏み出す準備すら出来ない。

だからこれは俺が第一步を踏み出すための第一歩。

自分で踏み出さなければいけない一歩なのだ。

とまあ、難しい単語がチラホラと出てきたが要約するとこんな感じ。

「何度もしつこく誘っていた私が言うのもなんだが、自分の意思で入院しない者に川神流を教える程川神院が抱える事の出来る人数は多くない」

少しの間を置いて百代さんは続ける。

「そもそも川神院本院には一分の例外を除いて中学生以下の入門は認めては居ない。支院ではその限りじゃないが、基本的にそう思っ
てくれて構わない。川神流を学ぶ人が増えるのはいいことだが、そのせいで質が落ちてしまつては元も子もない。だから本来は川神院に入るためには厳しい審査を潜らなければならないんだ」

確か、少林寺拳法を学ぶための学校は万を超える子供たちが通っているという。

少林寺同様、世界有数の武術院である川神院。それをブランドと勘

違いした親が川神院に子供を入院させようとするのは想像に難くない。

その他にも川神流の奥義を盗もうとするもの、邪な理由で川神流を修得しようとするもの、そういった者たちを警戒するのは自然なことであり実際に何度か入ろうとする輩が現れたらしい。

正直言つて、俺がこの年齢でこんなにもスムーズに入院出来たのはコネとしか言いようがないのだ。

「つまり、俺のようにある程度武術に対する適正があり、なおかつ自分の意思で学びたいと思わないとこの年齢じゃあ入院は認められないと？」

「そう、それが最低条件。後は、ぶっちゃけコネだな。」

やっぱりコネですかい

しかし納得はできた。ここに居る人たちは全員が本気で川神流を極めようとしている人たちばかり。

その人たちに、お互いを指導し合うことはあっても、態々子供に指導するような余裕はなく、その経験も無い。

「じゃあ一体誰が教えるんですか？今の話を聞くと俺の存在は迷惑以外の何物でもないんじゃない？」

「言い方は悪いが事実だ。子供相手に指導出来るとしたら指導の経験が豊富なルーさんや爺、師範代補佐以上の人達だが、逆に指導で常に忙しい彼らをたった一人の子供に当てる余裕はない」

淡々と言う百代さん。

何やら先ほどの決意が揺らぎそうな程の罪悪感が俺の心を占めてきているのは気のせいではない。

「ただし、迷惑という話は師範代や門下生達が指導すればの話だ。忘れていないか？適任がいることを」

俺に指導出来るほどの技術を持ち、俺に指導出来るほどの時間がある人物。

考え始めれば数秒で答えがでるほど簡単な問いだ。

「そういえばいましたね。俺と近い背格好で師範代補佐に近いレベルの人が」

「そう、という訳で抜擢されたのが私という訳だ。幸いお前の背格好は私と殆ど同じだから、指導もしやすいし年齢も近いから接し易い。そもそも友人な訳だしな」

「しかし百代さんに指導経験は？」

当然の疑問を口にする。

百代さんは実力こそ既に川神院の平均を超えているが、それが直接指導能力に繋がるとは限らない。

名選手が名監督になれるとは限らないとは良く言ったものだ。

「無い。正直上手く指導する自信も無い！」

「これまたキツパリと言いましたね」

「やったこともない事に自信を持つほど私は自信家ではないぞ」

「友人だから甘くするというのは？」

「私がすると思うか？」

「しないでしょね」

サッカーでキーパーが泣き叫ぼうと無慈悲にハットトリックを決めるといふ、基本嗜好がSの方に傾いているお方だ。

友人だからといって加減することはあっても手を抜くことは考えられない。

加減・・・してくれるよね・・・？してくれないと俺が死ぬ。

一つ一つ疑問が氷解していくのを感じながら改めて同意書を見る。話を聞けば聞くほどこの紙の重要性が分かってくるというか。

「もしかしなくてもこの紙、滅茶苦茶重いものじゃないですか」

物心ついた時から川神院に居て武術に触れていた百代さんならともかくとして、一年前に初めて触れた俺には先ほどの話は少し重いもの。

しかし、真剣に打ち込む川神院の人々を見て、武術に尊敬の念を抱いているのもまた事実だ。

「他に質問はあるか？」

最後通告と言わんばかりに百代さんが問いかけてくる。

「ありません。じゃあ書かせてもらいます」

百代さんと出会うきっかけになったのは親に連れてこられたから。

川神院に入ろうと思ったのは百代さんに勧められたから。

思えば周りに流されてばかりで決めた入院だ。最後まで自分自身
身の意味で決めよう。

一文字一文字に、その思いを込めるように書いていく。

力を入れすぎて歪になってしまった文字に、誤字がないかを確認して渡すと、百代さんは丁寧に二つに畳んでポケットにしまった。

「確かに確認した。今この瞬間からお前は川神院の一員だ。それ相
応な態度を日頃から心がけるようにな っはあ」

ようやく終わった、と大きく溜息を吐き出すと百代さんは正座を崩してその場に寝転ぶ。

「お疲れさま。随分と頑張って喋りましたね」

「駄目だ。堅っ苦しいのはやっぱり性に合わない」

ヒラヒラと手を振りながらゴロゴロと転がる百代さんの服装は際どいものになっているが、そこは一年間の付き合いだ。もう慣れた。

「鉄心さんに同意書を出すついでにお茶でも飲みませんか？勿論俺
が淹れます」

「いいなそれ。よし早速いこう」

誘った側がお茶を入れるのは当たり前。というか百代さんはお茶を淹れることが出来ないのだから俺が淹れるしかないのだが。

「ほっ！」

足の勢いだけで立ち上がった百代さんが元気よく襖を開け、外に出るのを確認した俺はゆっくりと立ち上がると、追いつくために急ぎ足で部屋を後にした。

「それにしても、ようやく悟も川神院の門下生か」

軽いスキップをするように歩いていた百代さんは、その足を緩めるとふと顔をあげてそう言った。

「どうしたんですか？随分と嬉しそうですね」

「嬉しいというよりはワクワクしている。私はこの日を半年以上待っていたんだぞ？」

そういえば百代さんと出会ってから1年近くが経ったのか。百代さんの勧誘は毎回聞き流していたから覚えていないが、今考えれば会ったびに、それこそ挨拶代わりに言っていた気がする。

「お前がここに入った。それだけでこんなにワクワクしているんだ。お前が私と同じステージまで来れたとき、その時はどれだけ嬉しいんだろうな？」

急に小走りで俺を引き離れた百代さんは、その場でぐるりと回転してこちらを向いた。

出会った時から少しずつ伸ばした綺麗な黒髪をサラリと流し、百代さんはそう言いながら、やはり嬉しそうな笑顔を浮かべた。

それは普段見慣れている俺からしても思わず見惚れてしまうほど綺麗なもの。

「……ええ、了解しました。いつかそっちまで行きますから、精々準備して待っていてください」

自然と緩んだ表情を引き締め、挑発的に言う。

出来ない約束はしない事を信条にしているが、今くらいはしてもいいだろう？

女性の期待に応えるのが男ってやつだ。父さんの受け売りだけど、たまにはそれに乗っ取ってみるのも悪くない。

「ああ、楽しみにしているよ。改めてよろしくだ」

百代さんと出会い、丁度一年が経ったこの日。俺は川神院の一員となった。

「ちなみに鍛錬の日程だが、最低週6以上は覚悟して貰うぞ?」

「殆ど休みなし!？」

小学生編 第二話（後書き）

あとがき

さてはて気づけば最後の更新から四か月。皆様お久しぶりでございます。息抜きです。

一日一行コツコツと書くような地道さをかけてようやく更新できました。

やっと就職試験が終わったので、出来るだけ早く更新していきたいと思っています。個人的には一週間に一話投稿出来ればいいかなー、なんて。（フラグ）

それにしてもこの百代、知的である。

いや、原作の百代が知的じゃないっていう意味じゃないですよ？単純に原作と比べてワンパクさが足りないというか、半分別キャラになってるような・・・？

百代さんの幼少時代と言えば良くも悪くも己に誠実なワンパク少女、と言った感じなのでその良さを再現したい。

皆さんの中にはまじこいSの体験版、すでにプレイした方もたくさんいると思います。未プレイの方は是非やってみてください。今回もかなり面白くなっていますよ。

しかしクローン組が可愛すぎて生きるのが辛い。特に弁慶さんは息抜きのストライクゾーンど真ん中を挟っていききました・・・

小学生編 第二話 裏

悟が川神院に入った日の夜。

川神院師範代である釈迦堂と、師範代候補として現在名が上がるほどの実力者であるルーの二人は、鉄心に呼ばれ彼の自室に来ていた。他の部屋同様に畳みに障子と、純和風な部屋だ。

意外なことに鉄心の自室は客間よりも狭く、調度品も少ない。川神院の道場や客間などと同様、『勇猛邁進』と達筆な文字で書かれた掛け軸がお決まりのように掛けてあるだけで、他には衣類の仕舞われた箆笥が置いてあるくらい。

知らない人が訪れればこちらの方を客間と勘違いをしても不思議ではない。

そんな質素な部屋の中央に、鉄心を含めた三人は円になり畳の上に座していた。手本のような綺麗な姿勢で正座するルー、足を崩して胡坐をかく釈迦堂、少々背中曲がっているもののそれを下品と感じさせず正座をする鉄心。

各々が座る体と畳の間には座布団が挟まれ、その横には湯気が昇る湯呑が置かれている。

三人が囲むようにして座っている畳には、一枚の紙が置かれている。昼間に悟が書いた同意書だ。

「ほっほ、見て見なさいこの文字を」

長く蓄えた髭を撫でながら、鉄心は目を細め紙に書かれた悟の字を撫でる。力強く書かれたせいでインクの滲んだ文字の上を皺が多く入った指が通る。

歪で読みにくい字だが、そこから悟の想いを感じ取った鉄心は細め

た目を自然と柔らかくさせた。

「はい、拙いながら決意がはっきりと見て取れる字ですね」

鉄心を見たルーが紙を受け取る。良い字だ、と再び呟いたルーは鉄心に習うように自分も文字に指を這わせ、やはり習うように顔を綻ばせた。

次に紙を受け取ったのは釈迦堂だ。太ももに片肘をつき、見下ろすように紙を眺めた釈迦堂は、

「というよりは、単純に気が込めてあるだけだろ？」

「釈迦堂？」

水を差すような物言いに、ルーの視線が厳しくなる。

「あー、『気は思いから発する』だろ？坊主の覚悟は本物って認めてる。別にちやかしてる訳じゃねえよ」

面倒なヤツ、と心の中で呟いた釈迦堂はその心中を隠そうともせず、に頭をボリボリと掻きながらルーから視線をそらした。

二人の間に険悪な空気が流れる。が、それはいつものこと

「まあまあ、二人とも落ちつかんか」

慣れた様子で二人を諫めた鉄心は、手を太ももに置き一度間を置く。ルーが了承の言葉と共に姿勢を直し、釈迦堂も一先ずは話を聞く程度の体勢に戻した。

それを確認した鉄心は、

「二人から見て、悟君の入院についてはどう思っかね？」

問いかけに二人は考える。ルーは数秒目を閉じ、釈迦堂は顎に手を置き、知りえる範囲での悟を自分なりに考察する。

「私から見ますと、7歳児には思えないほど礼節をしつかりと備えている落ち着いた少年です。武術の才能に関しても、百代から聞いたことや私自身の目で見た事を合わせて、優秀な部類と判断します現時点でも分かる通り、武術を修めなくても高い戦闘力を保持することが想像されることから、川神院で力の使い方を教えた方が良くと考えます。彼には無作為な力を振るうような人間になって欲しくは無い」

言ったのはルーだ。一息で喋り終えたルーは自分の意見は全て話した、と湯呑に手をかける。

次に釈迦堂が促されるような鉄心の視線に応え、

「それに関しては俺も賛成だ。あの小僧を放っておくのはちと勿体ない」

珍しくも釈迦堂とルーの意見が一致する。

といっても、ルーは悟の将来を含めて自分自身が最良の結果に繋がると考えた事に対し、釈迦堂は『ただ強者と戦いたい』という行動原理から同意したに過ぎない。

一人の武術家としても人間としても悟の成長を願い期待するルー。一人の強者として自分の戦闘欲求を満たすために悟の成長を企む釈迦堂。

意見の一致と動機の相違。

そのことを釈迦堂もルーも理解している。しかし、そのことを指摘

したところで話がただ長引くだけだ。と理解している二人はお互いにそれ以上言うことは何もなかった。

「ふむ、二人の見解は川神院の大勢、および儂と同じものじゃ。故に本日をもって川神院は識丈悟の入院を歓迎した」

逆に言えば悟の入院に対して一部では否定的な意見も出ていたのは事実だ。しかしそれは『子供』という理由が大きく、一人一人鉄心が説得することでその意見は数を減らしていった。

全てがなくなつた訳ではないがそれは仕方のないこと。全ての人間の思惑が一致することなど難しいことなのだから。後は悟が自分の力で信賴を勝ち取るしか方法は無い。

「そして、ここからが本題じゃ」

既に空になつた湯呑を置き、鉄心は切り出す。

「二人には悟君の師事を頼みたいのじゃ。勿論二人が多忙なことは理解してある。時間が空いた時にだけでも見てやってくれんかのう？」

その言葉にまず反応を示したのは釈迦堂だ。鉄心に対しても相変わらず不機嫌そうな表情を少し意外そうに変え、釈迦堂は、

「別に構わないけどよ。なんで俺なんだ？他に適任がいるだろ？」

そもそも悟との相性を考えると真つ先に候補から外すだろう。少なくとも自分ならそうする。と考えた結果の意見だ。

昔のように出会つた瞬間に10mの距離を取られる事こそ無くなつたが、未だに悟が釈迦堂に対して苦手意識を抱えていることには変

わない。

そしてもう一つ。釈迦堂は實力だけを見れば鉄心に次ぐ川神院のN
o.2だ。しかし、精神面を克服出来ていない、と度々評されてい
るのは自他共に知るところ。そんな釈迦堂が悟に思想に悪い影響を
与えるのではないか。

自虐的だが事実だ。と自覚しているからこそその意見。

話を聞いた鉄心は、ふむ、と頷き

「彼が時折放つ気の事は、二人とも既に知っておるだろう？」

「百代と初めて出会った時、合宿に同行し雪山に登った時。前者で
は身の危険を感じたとき、後者では自分の体力が極限状態になった
ときに発現しましたね」

気とは、本来数年の年月の修行を経てようやく習得するものだ。そ
して川神院において気の修行は全部で五段階で行われる。

第一段階『自己の認識』

第二段階『気の認識』

第三段階『気の発現』

第四段階『意識下での発現』

第五段階『制御』

悟は何の修行もせずに第三段階である『気の発現』に到達している
状態にある。

ただ、それが例外という訳ではない。

「武術を習う訳でもなく気の扱いを知る者は時折居る。釈迦堂君がそうだったようにの」

気とは産まれたときから人間が持つ潜在的な能力。

初めから持つている力に無意識下で気づき、それを行使するものは稀にいる。それが肉体に効果を及ぼすか、それとも気迫のような形を持たないものに効果が出るかは人それぞれだが。

鉄心の言葉に釈迦堂はようやく納得する。

自然な環境の中自力で気の発現をしたという共通点。それが自分が選ばれた理由なのだろうと。

ルーが選ばれたのは実力、指導経験、悟との相性を総合的に考えれば自然なことだ。

「だけど、あいつの気は素人にしちゃ安定している。ってところか？」

「その通り。彼の気は安定”しすぎている”。それこそ、気の修行に関しては少しの時間をかければすぐに終えてしまう程に」

釈迦堂の考察に鉄心が肯定をする。

釈迦堂とルーの頭に、天才、という単語が浮かぶ。

「しかし、百代からある話を聞いたことがあつての。既に気を発現しているならば、と好奇心から悟君に遊びと称して気の修行をやらせたことがある、と」

鉄心の言葉に二人は違和感を覚える。

「その修行の期間とは？」

「毎日とは出来なかったようでの。度々日にちを空いたが、一月はやったと言っておった」

ルーの問いに鉄心が答える。

「それちよっとおかしくねえか？」壁”は越えたんだ。一月もすりや自在とは行かずとも流石に自分の意思で発現出来るだろ」

「私たちが見ていないだけで、すでに悟君が第四段階まで到達しているというのは？」

一般的に気の習得における最大の難所は第三段階目と言われている。そして、そこを超えてしまえば気の習得”だけ”はしたと言っても良い。

一度でも気が発現してしまえば、あとは体が感覚を自然と覚えるため、数度繰り返し返せば自分の意思で簡単に発現させることが容易なのだ。

それが第四段階である『意識下での発現』。才能の無いものでも一週間もあれば到達可能とされている、気の修行に置いて一番簡単とされる段階だ。

しかし、釈迦堂とルーは悟が自分の意思で気を発現させたところを一度として見たことが無い。

「今日僕が見たところ、悟君の気の状態は第三段階。一年前の状態と変わらず『気の発現』のままじゃ」

ルーの考えが否定されたことにより、二人の違和感は益々強いものとなる。

第四段階に至るための修行を百代によって悟は一月も受けているという事実。自然の環境の中で第三段階まで到達したほどの才能の持ち主が、何故一番容易とされる所で行き詰っているのか。

更に言えば第五段階である『制御』の初歩。『安定化』を先に終えているにも関わらず、だ。

人によって得手不得手があることは、指導経験の豊富なここに居る全員が良く理解している。しかし、余りにも極端すぎる。第三段階を無意識に終えているということは、無意識に気の扱い方を体が知っているという事。体は知っている事を意識的に行うように切り替えるだけなのだから。

「悟君が才能豊かなのは周知の事じゃが、そのまま捉えるにしては少々違和感を覚える。儂も随分と長生きしてきたが、悟君のような子は初めてじゃ」

無論、気の状態だけを見て判断したわけではない。

鉄心の武術家としての勘が、今まで見てきたどの才能とも悟が持つものは違うのだと、そう告げる。

一息をついた鉄心は先ほどまで細めていた目を開き、川神院総長としての顔に変え

「そこで武術に対し心に重きを置くルー君。逆に武に重きを置く釈迦堂君。対極の思想を持つ二人の指導をもって悟君を育て、そして儂自身の中にある違和感が何であるのかを突き止めたい。異論は？」

「ありません」

「無え」

二人の返答に頷いた鉄心は、引き締めた顔を緩める。

「ではこの話はこれにて終了とする。夜遅くに呼び出してすまんかったの。今夜はゆっくりと休み、明日からも頼むぞ」

二人が退室した部屋に一人残り鉄心は思う。

悟はまだ七歳だ。

七歳。平均寿命から考えれば人生の十分の一も生きていない。成長期が終わり、考え方も固まってくる十数年後。このまま悟が正しい方向で成長していけば願ったり叶ったりというやつだ。そしてこのまま成長していけば、鉄心が願う通りになるだろう。

次に自分の孫の顔を思い浮かべる。

歴代でも随一の才能を秘めている子。世界でも五指には入るだろう。武術家になる未来を、想像するのは難しくない。

ただ不安を覚えるのは精神面の事。性根は優しいが、やや力尽くで問題を解決したがる傾向にある。今のところは大きな問題は見られないが将来的にどちらかに転ぶかは微妙な位置に現在の百代は居る。戦うためにだけに生きる修羅か。戦いを人生の指標の一つとして生きる武術家か。

時間はまだ豊富にある。しかし、その時間が吉と出るか凶と出るかわからない以上、現状打てる手は全て打っておきたい。

だから鉄心は悟の担当に百代を抜擢した。常識が無い判断だということは自分でも理解している。院内からも反対意見が多く出た。

しかし、半世紀以上に渡る指導経験、武術家としての勘がこの選択を良いと告げた。そして長く考えた結果、それが良い方向に繋がると、鉄心は半ばそれを強行する形で決定したのだ。

悟が百代を正しい道へと導き、また悟を百代が導いてくれる事を祈り、信じ。

「雛が殻を破る前から心配しすぎかのう。ほっほ」

自嘲するように鉄心は笑う。窓から外を眺めると満月を見た。登り具合からして既に10時過ぎといったところ。

少し冷えた体を温めようと、湯呑を口に近づけ、空になった事を思い出し畳に置く。

既に子供たちは夢の中だろう。昼間元気に走り回っていた孫”二人”の幸せそうな寝顔を想像する。

「どちらにせよ儂が彼らにしていられることは少ない。導くことは出来ても並び歩くことは出来ぬのだから」

良い夢を

眩き、鉄心は自室を後にした。

後に残ったのは温もりの残った三つの座布団と、中身の無い湯呑だ
け。肌寒い空気に触れ、徐々に熱を失っていく。

一方その頃の柊宅

『分かってるな！明日は学校が終わったらずくに川神院に来るんだぞ！』

「もうこれで6度目ですよ百代さん。ちゃんと覚えてますから30分毎に電話してくるのやめて下さい」

『明日から忙しくなるからな。今日は早めに寝てしっかり体を休ませておけ』

「はいはい、この電話が終わったらすぐに寝ますって」

『そもそもこの時間まで起きている事自体』

「百代さんが電話してくるせいでしょうが！！」

大人たちの憂いなど気にすることも無く、子供たちの夜は更けていく。

鉄心が迷惑電話を繰り返す百代に気付くのは、湯浴みを終えてからの事。時間にして30分以上経ったあとの事だった。

小学生編 第二話 裏（後書き）

あとがき

一週間以上かかってしまいましたでしたがなんとか更新できました。どうも、作者の息抜きです。

今回は鉄心たちの悟に対する考察。荒があるのはお約束。むしろ荒しかないように見えるのは気のせいではありません

気の説明に関しては独自設定でござえます。

何か習得簡単じゃね？と思ったけど、まあガクトの母ちゃんも使えることですしおすし（まああの人も大概規格外ではありますが）

それはそうとお気に入りに登録500件突破！

本当にありがとうございます^^

もうそろそろ総合評価1400ptも超えそうと、嬉しさを通り越して少し怖くなっています。主に良いものを書かなくては・・・というプレッシャー的に

読んでもらえて感謝です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5869s/>

真剣で私に恋しなさい！ 平和な日常を目指して

2011年12月1日14時54分発行